中央

歌舞伎研究怪談號

中座九月興行上演

『眞景累ケ淵』脚本掲載

松竹
共通觀覽切手

今回好劇家各位の御便利を圖り、松竹合名社經營各地劇場共通觀覽切手を發賣仕候間續々御用命の程奉希上候

一、觀覽切手は

種類——壹圓。貳圓。參圓。五圓。
拾圓。拾五圓。貳拾圓。五拾圓。

の八種にて切手と包裝は優美にして、四季折々の召上り物や運動場各賣店の御買上品及本家茶屋直營案内所等一切の御支拂に通用致候

一、觀覽切手は本社經營の各地劇場に通用致候

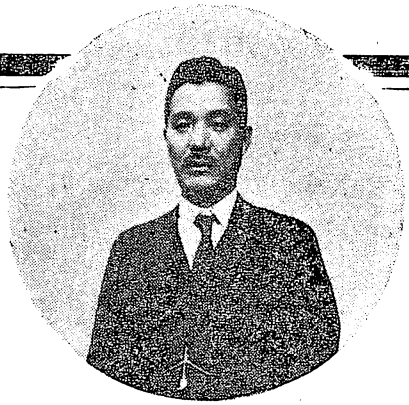
一、觀覽切手の樣式は、例へば拾圓切手なれば壹圓券拾枚、壹圓切手なれば貳拾錢五枚を添付しあれば御入用だけ切取りて御支拂になる仕組に御座候

一、觀覽切手は左記の發賣所にて發賣仕候、電話にて御注文被下候はゞ、何程にても迅速御屆可申上候

發賣所

大阪市南區久左衛門町八番地　松竹合名社
京都市河原町蛸藥師上ル　松竹合名社
大阪市道頓堀角　座
大阪市東區高麗橋通心齋橋筋南入　プレイガイド

松竹合名社經營の各地劇場に於て共通いたします



雜誌「中座」創刊の言葉

白井松次郎

□

「中座」は道頓堀に古い「昔」を傳へた純日本式の破風作りの屋根と古風な櫓の劇場であります。そしてそれは獨り大阪の持つ歌舞伎の唯一の殿堂たるのみならず、東西を通じて求めることのない木の香も床しい劇場としてペンキ塗の文化や、また鐵筋コンクリートの冷たい感じもこゝにはありません。暖かい一夕の團欒はこの「中座」の棧敷から生れます。美しい歌舞伎の錦繪はこの「中座」の舞臺にのみ展けられます。

□

「中座」は絶えず傳統の歌舞伎をうけついで、またこれを育て乍らこれからも行末長く道頓堀の一角に立つてゐるでせう。「中座」は日本固有の歌舞伎を演ずる劇場として、また一流の演劇を上演する權威ある劇場として、皆様の御愛顧を賜つてゐることを深く感謝して居ります。雜誌「中座」はその皆様の觀劇の手引草ともなり、また歌舞伎研究の一助ともならんと、こゝに發行の運びに至りました。どうぞ「中座」をお愛し下さいます皆様に依て、雜誌「中座」も育ちます様に偏へにお願ひ申します。

◇累の診斷書◇

中座（歌舞伎研究 怪談號）目次

寫眞口繪（初代圓朝の肖像◇（眞景累ケ淵）揭載の豫告◇市川猿之助（操三番叟）◇實川延若（渡海屋）知盛◇河合武雄（海の勇者）母親およし◇實川延若（眞景累ケ淵）十手下甚藏◇中村雀右衛門（自宅にて）◇嵐吉三郎（自宅にて）◇片岡松之助◇市川猿之助（眞景累ケ淵）新吉◇中村扇雀の近影◇中村霞仙の近影◇三代歌川豐國筆（累の亡魂）◇累ケ淵舞臺面）

雜誌「中座」創刊の言葉　白井松次郎

◈眞景累ケ淵（二六場）　三遊亭圓朝（2）

中座九月興行上演脚本　木村錦花（44）

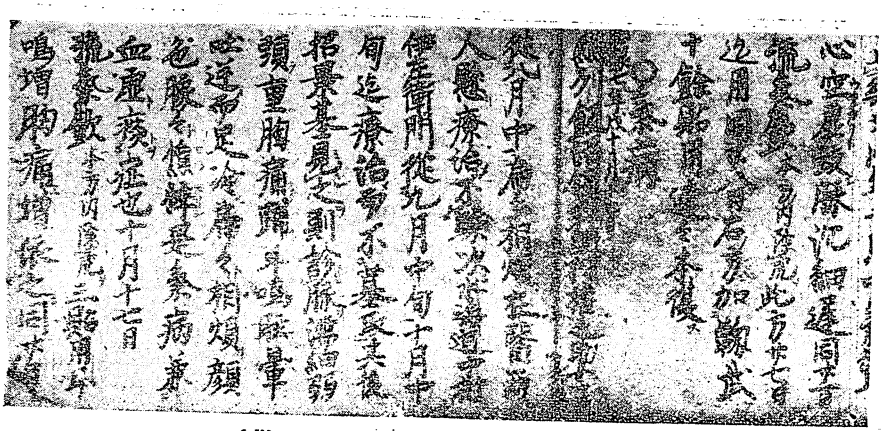
藝術家としての圓朝　高安月郊（43）

圓馬を通して見た圓朝　食滿南北（45）

「累ケ淵」脚色談　木林錦花（46）

扇子一本　姥谷愁（47）

初めての新舊合同　實川延若（52）



（茨城縣石下町荒川隆之助氏藏）

自由俳優としての合同　河合武雄　(52)

因果者の心持　市川猿之助　(53)

新舊合同の辯　大西利夫　(54)

延若、河合、猿之助（合同そゞろはなし）　島江鋏也　(55)

芝居と怪談　並山拜石　(62)

眞景累ケ淵に就て　三浦おいろ　(63)

喫煙室　蓼雨生　(63)

◇渡海屋（芝居見たまゝ）　河野巨縫　(48)

◇海の勇者（芝居物語）　長島富三郎　(58)

◇操三番叟（上演臺本）　(65)

編輯後記　成山生

松竹座

南自六二七一
前賣切符至六二七四
專用三一二七

浪花座

南一二四五九
前賣切符五七七八〇三九九
專用六三六一

中座

南一一三
前賣切符一五八
專用一二七九

角座

南一一七
前賣切符五五三〇
專用六九五六

辨天座

南二八
前賣切符七四二八
專用六九七八

朝日座

南三一七

文樂座

本局七九八
前賣切符
專用八九七

樂天地

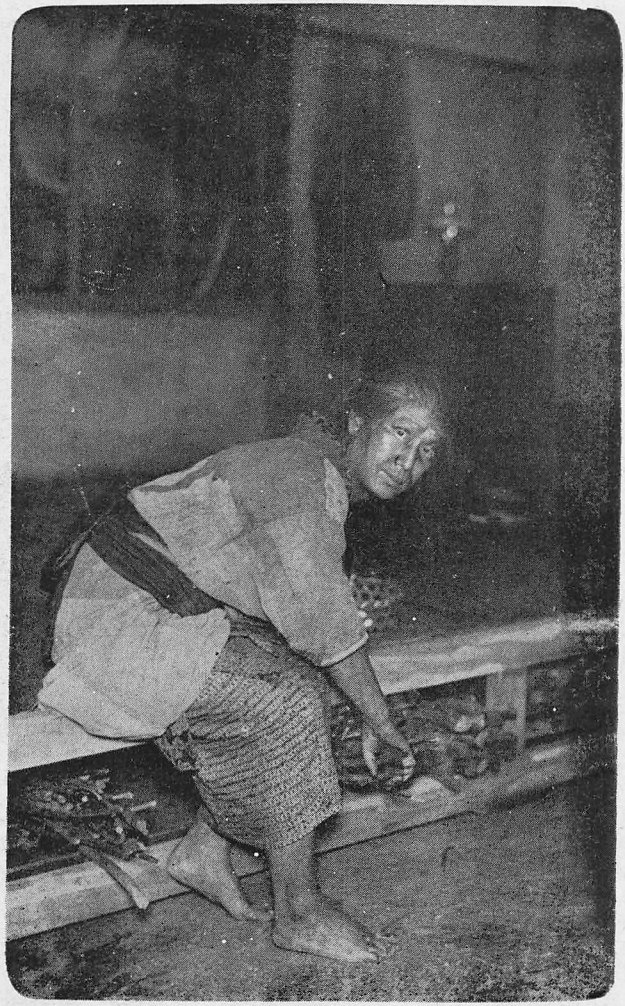
戎三五三三

初代圓朝肖像とやまと新聞に於ける「眞景累ヶ淵」掲載の豫告

中座九月興行

「曳番三操」の助之猿川市

盛知の「屋海渡」の若延川實は内閣



中座九月興行

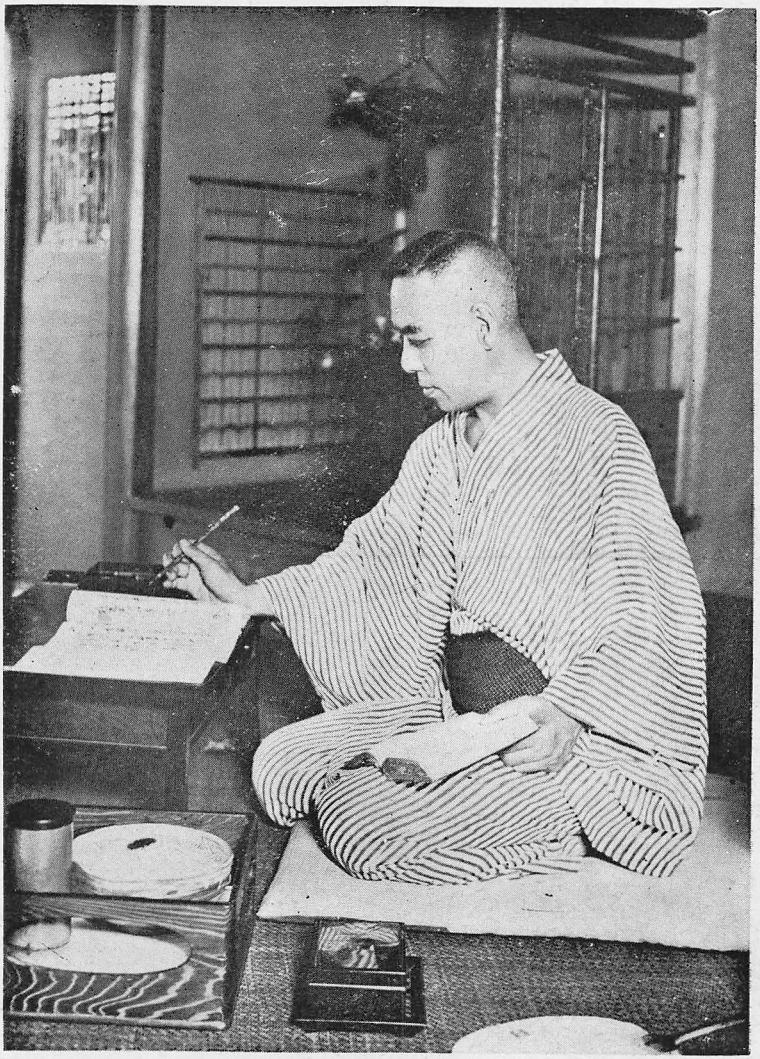
……現代劇……**海の勇者**……

—— 河合武雄の母親おしよ ——

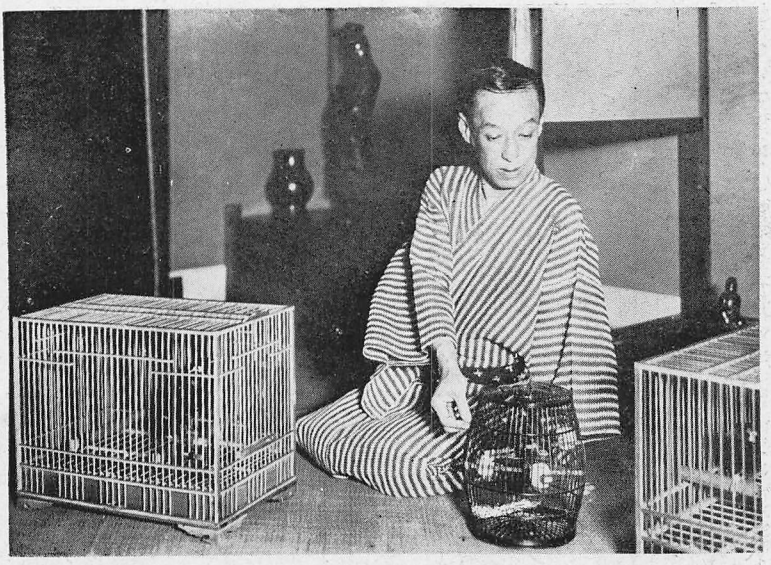
中座九月興行

——眞景累ヶ淵——

實川延若の土手下甚藏



門衛右雀村中るけ於に宅自
すまあてし扮に局の侍典で(屋海渡)

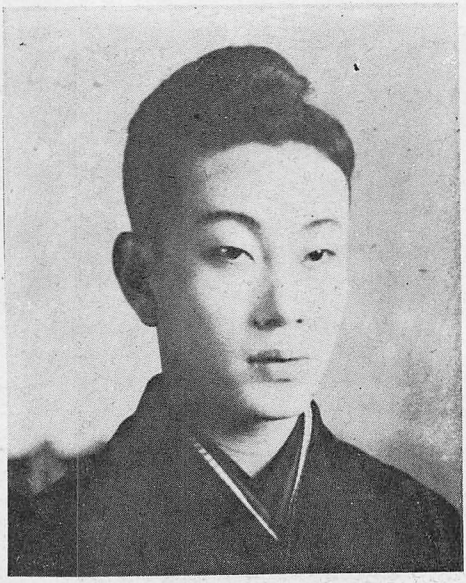


中座九月興行

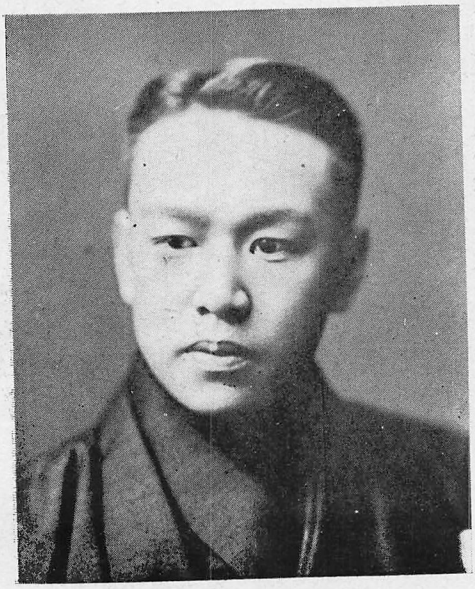
眞景累ヶ淵で下總屋三藏に扮するすでりぷのていおの趣味の自宅における嵐吉三郎

市川猿之助の
眞景累ヶ淵の新吉

渡海屋の辨慶に扮するる
片岡松之助



眞景累ヶ淵でおなつに累る
中村扇雀の近影です



眞景累ヶ淵で百姓清六と下女お せ な
に扮する中村霞仙の近影です

中座九月興行出演の花形

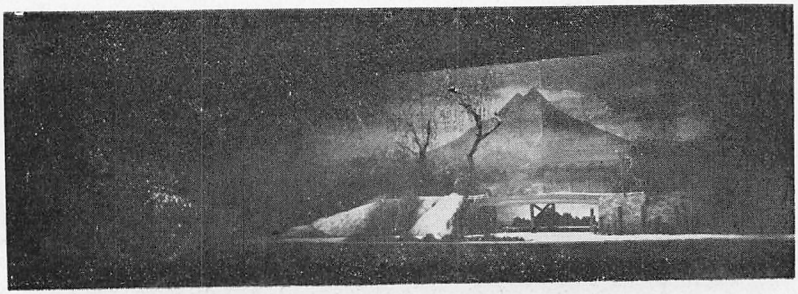
三代目豐國筆

見立三十六歌仙の内

累の亡魂

（吉川觀芳氏所藏）

この圖は幽靈の毛彫の精巧なるを以て版畫中最も有名なものです



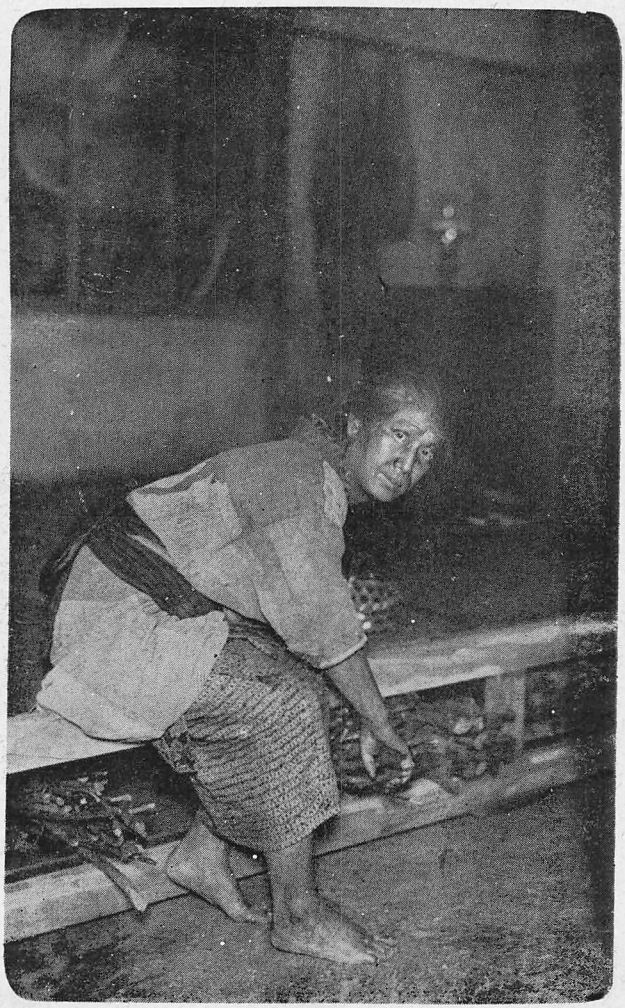
面臺舞場の淵ケ累　淵ケ累景眞

初代圓朝肖像とやまと新聞に於ける「眞景累ヶ淵」掲載の豫告

中座九月興行

「曳番三操」の助之猿川市

盛知の「屋海渡」の若延川實は内間



中座九月興行

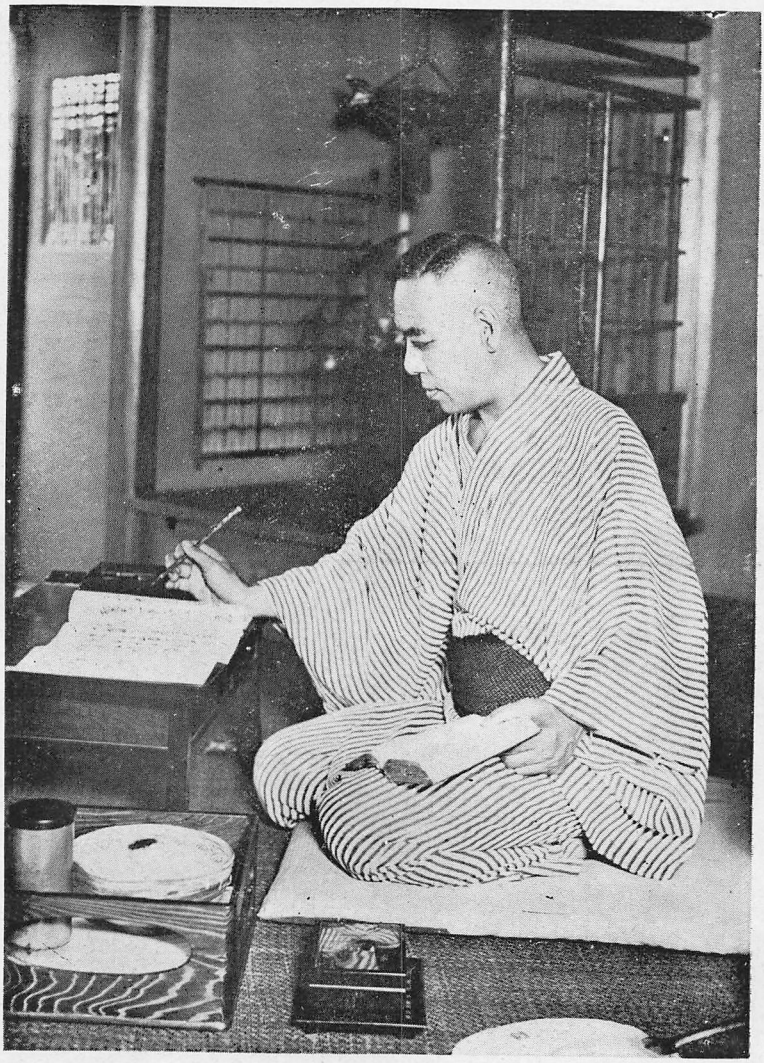
現代劇……**海の勇者**……

—— 河合武雄の母親おしよ ——

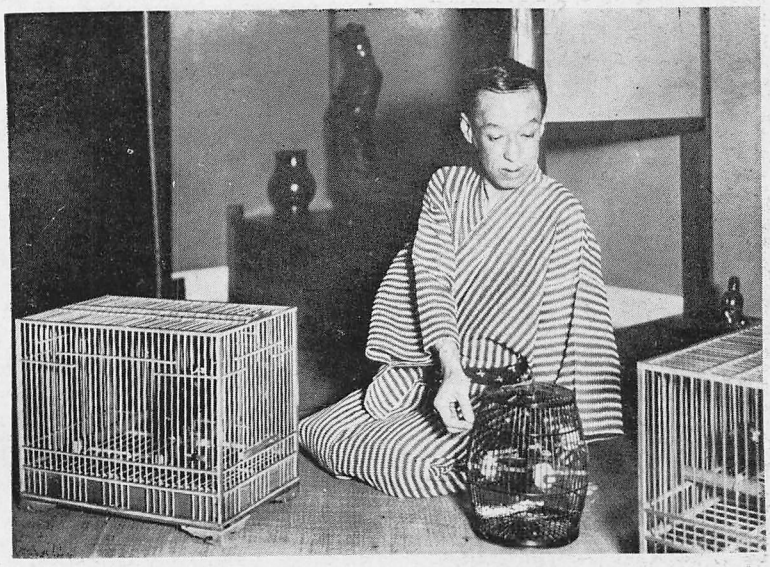
中座九月興行

——眞景累ヶ淵——

實川延若の土手下甚藏



自宅に於ける中村雀右衛門
すまあてし扮に局の侍典で（屋海渡）

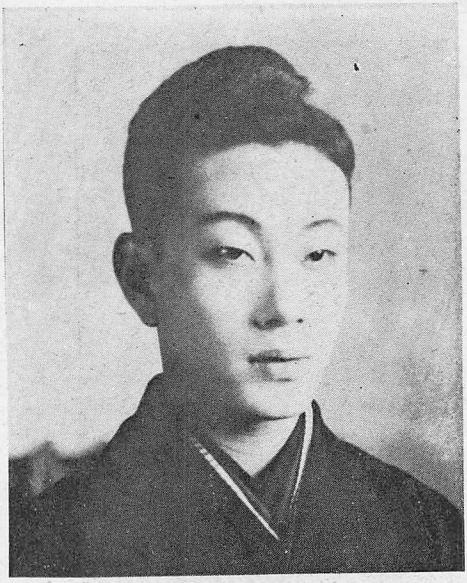


眞景累ヶ淵で下總屋三藏に扮するすでりぶのていおの趣味の自宅に於ける三郎吉嵐

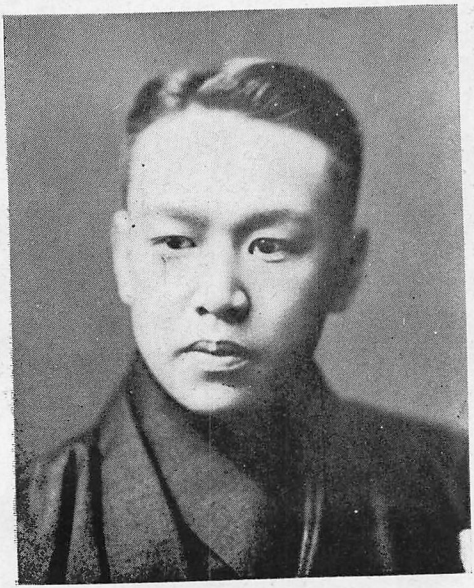
中座九月興行

市川猿之助の
眞景累ヶ淵の新吉

渡海屋の辨慶に扮する
片岡松之助



眞景累ヶ淵でおなるに累
中村扇雀の近影です



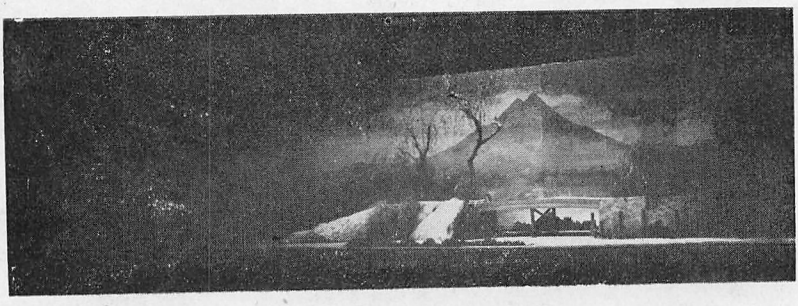
眞景累ヶ淵で百姓清六と下女お
に扮する中村霞仙の近影です

中座九月興行出演の花形

（吉川觀芳氏所藏）

三代目川豐國筆
見立三十六歌仙の内
累の亡魂

この圖は幽靈の毛彫の精巧なるなるものは最も有名なものの中で以て版畫でもすでに



面臺舞場の淵ケ累　淵ケ累景眞

癌中

號談怪・究研伎舞歌

序幕　第一場

二番目　眞景累ケ淵

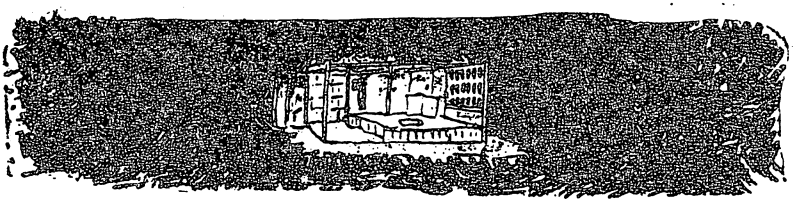
三遊亭圓朝作
木村錦花脚色

登場人物

新吉	猿之助
土手下の甚藏	延若
羽生屋娘お久	河合武雄
名主惣右衛門	當之助
妾お賤	河合武雄
下女おみつ	芦鴈
下總屋三藏	吉三郎
三藏の妹おるい	扇雀
番頭金兵衛	鴈藏
手代助八	冠之助
小僧長吉	延幸
下女おせな	霞仙
法藏寺の僧了念	笑猿
寺男幸助	鴈若
媒酌人作右衛門	松幸
女房おくわ	吉郎
百姓清六	霞仙
馬方作藏	段猿
その他村の者、捕人、踊りの男女なご	

場所

一　下總の國累ケ淵
二　土手下甚藏内
三　法藏寺裏墓場
四　下總屋店先
五　下總屋離れ座敷
六　土手下妾宅
七　根元聖天山
八　元の妾宅
九　絹川堤



同　第二場

序幕

第一場

舞臺は上手から下手へかけて草土手。前には絹川の流れ、後には筑波山が遠く見える。やゝ上の方に土橋、其の傍に大なる柳の立木あり、下の方にだらの〳〵下口、此處に用水があり、用水邊にはボサツカが生茂り、其處は入合に成つて居る。七月二十七日の暗き夜。水の音が淋しく聞ける。

（幕が明くとすぐ上手から、遊人風の男が二人駈出て來る。）

甲。おい待つて呉れ、待つて呉れ。熊や甚藏の野郎は、何うしやあがつたか、旨く逃げて呉れゝば好いがな。

乙。えゝ、何を言つて居るのだ。人の事は如何でも好いや。折角此處まで逃げて來たのだ。愚圖々々して居て、捕へられちやあ詰らねえモウ一息だ。早く來なよ。

（二人は其の儘土手を下りて向へ入る。遠方に雷が鳴り、稲光がして來る。間もなくザツといふ強い雨に成る上手から、手拭で頰被りをして、包みを背負つた新吉と、お久が、手を引合つて、早足に出て來る。）

お久。新さん。新さん。

新吉。え、何だね。

お久。まあ少し待つてお呉れよ。大層降つて來たぢやあないか。雷樣まで鳴つて……もう私や一足だつて、歩かれやしないよ。

（恐しさうに耳を押へて、木蔭に立竦む。）

新吉。そんな事を言はないで、もう此處の辛抱だ。先刻糀屋で聞いたには、此の土手を廻つて下のさへすれば、直に羽生村だといふ事だから、少しも早く伯父さんの家へ行つて、休むこしやう。

お久。でも私や、息がはずんで歩かれない……往生だから、此處で少しの間、休ませてお呉れな。

新吉。仕樣が無いな。ぢやあ少しの間、此の木の蔭で休んで行くこしやう。

（二人は柳の木蔭へ入り、手拭で、濡れた肩先や手足を拭ひなどする）

お久。あゝ、是で少しは落付いた。でもねえ新さん。私は日頃の願ひが屆いて、お前と二人で恁うやつて旧舎へ逃げのび、是から世帶を持つかと思へば、どんな苦勞も忘れてしまひ

同　第三場

嬉しいと思つてゐるが……お前は男振りは好し、浮氣者だと聞いて居るから、萬一とした此の先々他の女に見替へられ、捨てられるやうな事がありはしないかと、今からそれが、案じられてならないよ。

新吉。何だねえ、お久さん。見捨てるの見捨てないのと、昨夜初めて、松戸へ一緒に泊つたばかりで、疑るこころは無いぢやあないか。

お久。でも、彼のお師匠樣のやうに、私が若しや、長煩ひでもしたら、きつと打棄られるに違ひはない。

新吉。何を詰らない事を言つてるんだ。師匠の家に居た時分から、お互に思ひ合つて居た、二人の仲ぢやないか。師匠は彼樣して死んでしまひ、お前は生さぬ仲の阿母に、苛められるのが辛いと言つて、淵川へでも身を投げて死なうと覺悟をした處を漸う二人の念が屆いて　此の下總へ驅落はしたものゝ、他に何の的もなく、お前の伯父さんを便つて行き、末始終は厄介に成る私だもの、何でそんな、不人情な事をして好いものかね。

お久。それを聞いて安心しました。ぢやあ新さん。屹と見捨てはしないねえ。

新吉。念を押すにやあ當らないよ。（空を見る）好い鹽梅に、少し小降りになつたやうだ。此の間に早く出かけやう。

お久。あい。

新吉。暗いから、足許をよく氣をつけて行くが好い。

お久。あい。（行かんとして、ふと何物にか躓き倒れる）あゝ痛、痛……。

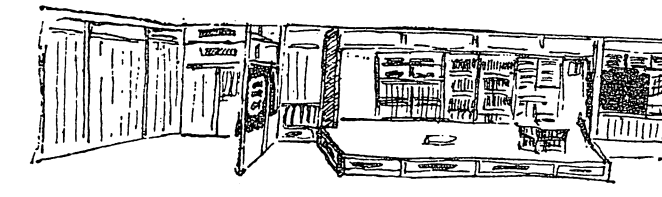
新吉。おゝ、何うした。何うかしたのか。

お久。新さん。石の上か何かへ膝を突いたので大層痛むから、見ておくれよ。

新吉。どれ、どれ。（探り見て、驚く。）おゝ、こりやあ大變な血だ。（いひつゝ再び四邊を探ると、草刈鎌が手に觸る。）おう、危ねえ。こりやあ鎌だ。草刈が置いて行つたものらしいが……何にしても困つたなあ。眞暗で見當は附かず……まあお待ち、いま手拭で縛るから。

お久。あゝ痛……。どうもズキズキ痛んでたまらないよ。

新吉。然うでもあらうが、まあ些と我慢をしてお呉れ。負つて行つて遣りたくも、包みはあ



るし……。さあ、此の手拭で縛つた上を、又かう縛つておいたから、もう大丈夫だ。私の肩へつかまつて、其邊まで歩いてお呉れ。

（新吉はお久を助けて歩き出す。お久は跛をひきながら）

お久。有難う。本統に濟まないね。（ふと立止る。）ねえ新さん。私のやうな意氣地なしの者を、恁うして連れて歩くのは……嘸迷惑な事だらうねえ。

新吉。なに迷惑な事があるものか。お久さんとなら、どんな苦勞もする氣だもの。

お久。否え、それは嘘だらう。いまに見捨てるに違ひは無い……。（其のまゝ大地へ座つて、さめ〴〵と泣く）

新吉。大丈夫だよ。何時までそんな、詰らない事を言つて居るんだ。お互に苦勞は覺悟の前ぢやないか。

お久。そんなに旨くお言ひでも……屹といまに見捨てるよ。

新吉。お久さん。お前、今に成つて、何故そんな事を言ふのだね。

お久。何故つて……。新さん。……私や、こんな顔に成つたもの……。

新吉。えゝッ。

（ピカリと光る稲光のかげに、新吉は、ふとお久の顔を見て仰天する。何時の間にかお久の相好は怪しく變つて居る。）

新吉。や。お前は師匠……。

（我を忘れて、手に持つ鎌で、お久を目がけて斬付ける。）

お久。あれえ。

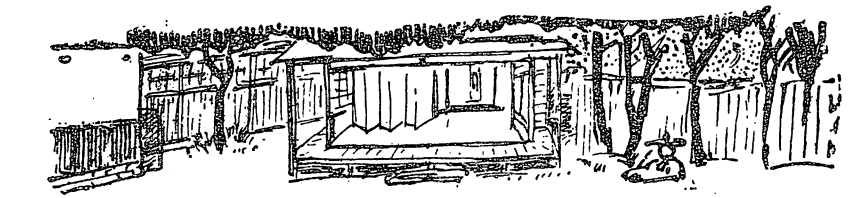
（此時又雨は烈しく降出す。お久は苦しき息の下から、新吉の鎌を持つ手に縋りつくを、新吉は拂退け、一寸立廻つて、再び鎌を咽喉へかける。是にてお久は前へのめり、草を摑んで悶え苦しむ。）

お久。えゝ、恨めしい……。（いひかけて、其の儘ぐつたり、息は絶える。）

新吉。（お久の顔を、恐る〴〵透かして見て。）おゝ、矢張りお久か。勘辨して呉れ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛……。

（新吉は鎌を投棄て、震へながら合掌する。此時、ボサツカの中から、土手下の甚藏が、大兵の姿をぬつと現はす。）

甚藏。此の野郎……。



同　第二場

（甚藏は後から新吉の襟髪をぐつと掴む。新吉はアッと言つて、夢中で其の手を掻きむしつて振放し、遁る拍子に腹這ひに倒れる。甚藏は是を追掛けんとして、新吉に躓き、土手へ轉ぶ。再び起上つて組附かんとする時、彼方に凄まじい響がして、落雷する。これに驚いて、甚藏は用水の中へ辷りおちる。新吉は後をも見ず、土手を下りて。向へ一散に駈けて入る。）――暗轉

第二場

茅葺屋根の粗末なる一軒家。舞臺の左右は暗く此家の内部だけ見える。正面に破戸の入口があり、こゝに百姓清六は、灯の點いた提灯を傍において、圍爐裡へ粗朶を焚いて居る。前の場と同日で、夜はやゝ深く、法藏寺の鐘の音がかすかに聞える。

（戸口を叩く音がして、新吉の聲が聞える）

新吉。もし、御免下さいまし。少々お願ひ申します。

清六。（振返る）誰だね。

新吉。私は江戸の者でございますが、夜に成つて此の降りに逢ひ、誠に難義を致しますが雨の晴れます間を、少々、士間の隅へでも、お置きなすつて下さいまし。

清六。あゝ、左樣かい。それはゐらく困るだらう、構はねえから、そこを明けて入るが好ゐだ。

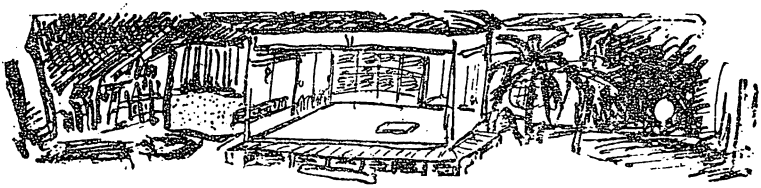
新吉。これは有難う存じます。お蔭樣で助かります。

（新吉は、正面の戸を明けて入つて來る。その着物はびつしより濡れて居る。）

清六。やあ、酷く濡れて居るな。さあ、さあ、焚火の傍へ來なさるが好え。

新吉。有難うムいます。私も御當地は初めて、勝手が分りませんごころへ、夜の道で、いやもう、川へ落ちたり、田へ入つたり、難義を致しまして漸う此處までまゐりました。ごうか今夜一晩だけ、お泊めなすつて下さいまし。

清六。泊めるつたつて、泊めねえつたつて、こりやあ俺の家ぢやあねえ。俺も通りがかりだが、雷は鳴る、大雨は降る……什樣が無えから、此處の家へ駈込んで、雨止みをして居ただけ、主人は今、留守だけんど、火の氣が無えから、些こばかり粗朶あ突つ燻べて燃やし



て居ただよ、俺の家で無えから、泊める譯にやあ行かねえだ。其内にやあ主人も歸つて來るだらうから、まあ、着物でもあぶり、蓑でものんでゆつくり休んで居なさるが好えだ。

新吉。では、あなた樣の家では、無いのでムいましたか。

清六。俺の家ぢやあ無えが、同村の者で、雨に降込められたから休んで居るのだ。

新吉。さうして、こちらの旦那樣は、何時頃お歸りに成りませうね。

清六。なあに、此處の主人は、滅多に家にやあ居た事は無え。何時歸ると、私らに斷づて出懸けた譯で無えから、受合へねえだが、五日でも十日でも、留守にするなあ例の事だ。そんな酒酌は要らねえから、まあこつちへ寄るが好えだよ。

新吉。へえ。大分泥だらけに成つて居りますので……。（いひながらおづ〳〵焚火の傍へ寄る）

清六。俺だつて泥足で駈込んだから、構はねえ、だよ。（新吉の樣子をぢつと見て）お前樣……見た處が未だ若いだね。何にしても江戸の者が在鄕へ來ちやあ、泊る所に困るだらう。宿を取るにやあ、水街道へ行かねえでは、無えからなあ。

新吉。左樣でムいます。私も水街道の方から參りましたので……こんな酷い雨に逢はうとは思ひませんでした。實に雨には困りますねえ。

清六。なあに、今雨が降らねえぢや、作の爲に好く無えから、俺の方ぢやあ、降る事も好えのだよ。

新吉。成程……左樣でムいませうね。だが雷には、實に驚いてしまひましたよ。こゝらは筑波近いので、雷は卸々酷うムいますね。

清六。なあに、雷も鳴る時に鳴らないと、作の爲に好くねえから、鳴るのも好えだよ。

新吉。へえ。左樣でムいますか。（一寸手持無沙汰に成る）時に、こちらの旦那樣は、何の御商賣でムいませうな。

清六。別に商賣は無え、遊人だ、あつちへ二晩こつちへ三晩と、何處から何處へ行くか知れねえ、やくざ野郎さ。

新吉。では、大分お道樂な方だと見えますね。

清六。道樂つて……村ぢや蝮と言はれて居るほ

同　第二場

ごの、厭な奴だが、又、用の役にやあ立つ男さ、

（此時ガラリと戸を明けて、甚藏が歸つて來る）

甚藏。あゝ、酷い目に逢つた……。

清六。おう、甚藏ごん。歸つたかね。

甚藏。むゝ、今歸つたよ。（ふと顏を見て）やあ誰かと思つたら清六か。

清六。この隆るのに、何處へ行つただね。

甚藏。何處へ行くものか。松が賀で、詰らねえ小博奕へ手を出して、打つて居ると、不意に手が這入つたから、一生懸命逃げ出したが、暗さは暗し、危ねえから、用水邊のボサツカの中へ、かくれてゐたのよ。

清六。そいつは險呑な處だつたな。俺は通りかかつて、雨に逢ひ、おまけに雷まで、ふらく鳴出したから、魂消て、お前らの家へ駈込んで、今圍爐裡へ一燻べした處だ。

甚藏。好いやな。ごうせ明放しの家だから……

（古びた行燈を持出し、灯を點しかけて、ふと新吉の方を見る）おや、お前は……此處らで見かけた事の無え男だが……何處の者だえ。

新吉。へえ。（手を突く。）

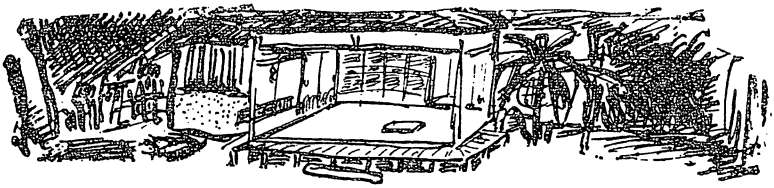
清六。おう、甚藏ごん。此の人は江戸の者だが矢張り此處へ雨宿りに來て、泊めて呉れろと賴むのだが、俺が家で無えからと今話しかけた處だよ。（新吉に對つて）これが、此處の主人ごんだよ。

新吉。（改めて手を突く。）これは初めまして……。私は江戸の者で、小商ひを致します新吉と申す不調法者で……。御當地へ參りましたが、生附きの雷嫌ひに、つひ、こちら樣へ駈込みましたが、お留守の事ゆゑ、泊めて頂く事も出來ず、どう致さうかと思つて居りましたが、好くお歸り下さいました。餘り押附けがましいお賴みではムいますが、何卒今晩だけの處を、どこの隅へでも、寢かして頂きますと、有難い事でムいますが……。

甚藏。（その樣子をつくゞ見て）成程、好い若い者だ。まあ好いや、泊つて行きねえ。見る通り、着る物もなく、留守勝だから、食物も無えが、ゴロリと寢るだけなら、一晩泊つて明日行きねえ。

新吉。それは有難うムいます。（ポツトする）

清六。やれ、やれ、さう極つたら俺は歸るよ。



同　第三場

甚藏。まあ好いやな。もう少し話して行きねえ

清六。だつて、雨も上つたし……大分遅く成つただからな。

甚藏。おい清六。お前歸るなら、迂濶しちやあ往けねえよ。今夜ボサツカの脇に、人殺しがあつたからな。

清六。え、。人殺しが……。（吃驚して、又座り込む）

甚藏。手が這入つたので、絹川土手まで遁げて來て、ボサツカの中へかくれて居るこ……暗くつて好くは分らねえが、突然に、キヤツこいふ女の聲よ。

清六。（青く成る）へえ……。

甚藏。俺も今まで、本統に聞いた事あ無かつたが、芝居なんかで、女が斬殺される時に、キヤアこか、アレーこか言ふが、それごころぢやあねえ。隨分薄氣味の惡いものだ。

清六。怖かねえ事だ。それからお前、ごうしただ。

甚藏。何うしたつて、凄いやな。浮つかり飛出して、怪我でもしちやあ詰らねえから、息を殺してかくれて居るこ、其の野郎は、刀や何かで殺すほごの者でも無え奴で、鎌でもつて殺しやあがつたのよ。

清六。鎌でね……。ふうん、酷え事をする奴だなあ。

甚藏。女の死骸は、川の中へ落ちたやうだつたが……忌々しい畜生だ、こんな奴が此の村へくりや、盜人にでも這入りやあがるだらうこ思つて、俺は其所へ飛出して、其の野郎の襟首を取つて引摺り倒した……。

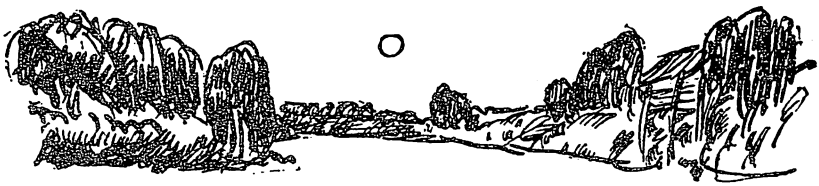
清六。うん、流石は甚藏兄いだ。ゑらい事を遣らかしたな。

甚藏。こころが不可ねえ。其の途端に、雷が落ちたんだ。

清六。さうく、彼の雷は、淨禪寺ケ淵あたりへ落ちたらしかつた……お前も、さぞ魂消ただらうな。

甚藏。他の事にやあ驚かねわが、雷は大嫌ひだ。面喰つて、田の畔へ轉げ落ちるはづみに野郎にやあ遁げられちまつて……忌々しい事をしたよ。

清六。そんな事が有つた後ちや、怖かなくつて通れやしねえ。



同　第四場

甚藏。だから、氣を附けて行きねいよ。

清六。其の野郎……未だ居るかだ。

甚藏。もう居やあしめえ。好い女なら殺すだらうが、お前ぢや殺す氣遣ひは無えから大丈夫だよ。

清六。それも左樣だな。ぢやあ俺あ止んでる間に歸るこしやう。（提灯を持つて立上る。）又、畑の物でも出來たら持つて來ようよ。

甚藏。何を持つて來て呉れたつて、煮焚をするのが面倒だからな。まあ、諸白の五合もさけて來ねえ。

（清六は怖々ながら歸つて行く。甚藏は爐の火を掻廻しながら、新吉の方を見る。）

甚藏。おい、若いの。もつこ此方へ寄つて、あたりねえ。

新吉。へえ。（もじ〳〵しながら傍へ寄る。）

甚藏。お前、江戸から來るにやあ、水街道から來たか。それこも船で來たか。

新吉。へえ。渡しを越して、弘敎寺こいふお寺の脇から、土手へ出てまゐりました。

甚藏。此方へ來る土手で、よく人殺しに出會さなかつたな。

新吉。へえ。運好く其の人殺しには。

甚藏。出會さなかつたか。さうかい……まあこいつを見ねね。（腰にさげて來た鎌を取つて、新吉の目先へ差出す。）是はの、其の女を殺した奴が、投出して、置いてつた物だが……研澄ました此の鎌で、女の咽喉笛を刳りやがつた。酷い雨に打たれたんで、洗落されたやうなものゝ、まあ好く見ねえ。血は滅多に落ちねえこ見えて、浸込んで居るのが解らあ。これで女を、滅茶々々にやりやあがつた……

新吉。へえ、ごうも誠に、恐ろしいことで……

甚藏。なに。

新吉。へえ。全く……怖い事でムいます。

甚藏。お前も怖いこ思ふかえ……。其奴がね、此の鎌でやりやあがつたよ。

新吉。へえ……。

（新吉は氣味惡く、次第に後の方へ退る。だんだん身體が震へて來る。甚藏は突然に、鎌を新吉の膝の前へ投出す。新吉は驚いてハツこ、飛び退く。）

甚藏。なあ。餘り氣味の好い物ぢやあ無え。お前、今夜は泊つて行きねえよ。（念を押すやうに言ふ。）

新吉。へい。有難う厶いますが……何うやら雨も上つたやうで……これで私も、お暇を致さうこぞんじます。

甚藏。なに、お暇をする……。變な事をいふね。是から行つても、水街道まで出なけりやあ、泊る所は無えんだよ。まあ、好いやな。江戸こ聞きやあ懐しいや。俺あ此の下總で生れたんだが、ゐ郷の菊坂に長く居た事もある。だから江戸つ子は好だ。お前も、子柄は好し……今の若さに、此の片田舎へ來るにやあ、些たあ譯もあるだらう。なあ。袖振り合ふも他生の縁だ。何か小商ひでもする氣なら又、相談相手に成つて遣らうぢやあ無えか。（優しく言ふ）

新吉。（やゝ落付いて）有難うぞんじます。江戸こ甲しても、肩書ばかりで、兄弟身寄も厶いませんが、恁ういふ處へ參りまして、あなた樣のやうに、さう仰しやつて頂きますこ親類にでも逢つたやうで、心丈夫て厶います。

甚藏。然う言やあお互だ。俺は土手下の甚藏こいふ者で、小博奕が出來る處から、長年此處に住んで居るが、根がやくざ者だから、村の奴等からは、いつも退け者扱へよ。何うだえ、一つ兄弟分に成らうぢやねえか。

新吉。（一寸狼狽して）に、、兄弟分……。

甚藏。嫌かね。

新吉。否に、飛んでもない事を……。實は私も少し譯が厶いまして、此の下總まで或人を便つて參りましたが、此方へ參るこ、其の人が、突然に亡くなりまして……。

甚藏。死んだのかね。

新吉。へね。それが其の……へね、何で……變な事に成りましたので……へね、もう何處へも參る的も無いので厶います。

甚藏。さうか。そいつあ氣の毒だ。さういふ事なら尚更だ。兄弟分にならうぢや無えか。

新吉。（漸うに決心する。）へい。ではお詞に甘へまして……何分こも親分の、御贔屓お引立てをお願ひ申します。

甚藏。（機嫌好く。）好いこも、何も心配をする事あねね。こころで話は早ねが好いや。是から兄弟分の契約をするこして田舎は堅ねから、甚藏の弟分だこ言つて通れば、ごんな間違ねあつたつて、他人にケジメを食ふやうな氣遣ねは無ね。俺の事こ言やあ、人が皆嫌がつてるから、それだけお前の強味にならあ。

新吉。へね。まここに有難い事で厶います。

甚藏。そこで、兄弟分の杯だが……生憎酒は切らしちまつたが、昨日入れた番茶が溫く成つてゐる。俺が是を先へ飲むから、お前も半分飲むが好い。これが兄弟分契約の杯だ。（傍にある土瓶の茶を、茶碗へ注ぎ、半分飲んで、新吉に

渡す。）

新吉。有難うムいます。恰度咽喉が乾いて居りますから……

……。（受取つて奇麗に飲干す。）是で私も、漸う安心を致しました。

甚藏。さうか。ぢやあ好いな。二人は是から兄弟分だよ。

新吉。へゐ。

甚藏。もうかう成つたら、何事でも、兄貴に物を隠しちやあ不可ねゐぜ。

新吉。へゐ。

甚藏。悪い事でも、好い事でも、打明けて話合ふのが兄弟分だ。好いか。解つたか。

新吉。へゐ。

甚藏。處で、早速だが……今夜土手で、女を殺したなあ、お前だな。

新吉。ゐつ。な、な、何こ仰有いますので……。

甚藏。こぼけるな。此ん畜生……言ひねゐ、言つてしまひねゐよ。

新吉。こ、飛んでも無い……私は、そ、そんな恐ろしい事を……な、な、何で……。

甚藏。こぼけるのも好い加減にしろ。先刻鎌を出した時、手前の面は變つたぜ。殺したこ、素直に言つてしまふが好いや。

新吉。たこへ何こ仰有いましても、私はそんな……他事の事こは違ひます。人を殺したなごこ、苟にもそんな事を仰有られては……迷惑を致します。わ、私は此處には居られません。

甚藏。居られなけりやあ、こつこつ出て行け。さあ、出て行け。此方で無理に置かうたあ言はねゐ。これ、好く聞けよ譬へごんな事があらうこ、好い悪いを明し合ふのが兄弟分だ。お前がごんな事をやらうこ、兄分の俺の口から縛らせる氣遣へは無ゐ。決して繩附きなんぞにやあしねゐから、安心して、殺したら殺したこ、判然言へこ言つてゐるのだ

新吉。何うもそれは困りますねゐ。何もそんな事を……他の事こは違ひますからねゐ。人を殺すなんて、そんな私が……。

甚藏。隨分分らねゐ才槌だな。慥にお前が殺した處を、此の黑い目で睨んで居たのだ。言はなけりやあ俺も意地だ。是から手前を、代官所へ引いて行くから、さう思へ。さあ行きねゐ。（立ちかゝる。）

新吉。そんな無理を仰有つても。

甚藏。何が無理だ。俺の言ふ事が何で無理だ。お互に、悪事を言つて呉れるなこ、隠し合ふのが兄弟の交誼ぢや無ゐか殺したなら殺したこ、打明けて言ひさへすりやあ、俺はごこまでも庇つて遣る……。だから言へよ。言はなきやあ代

官所だ。さあ、俺と一緒に行け。（立上つて、新吉の手を引く。）

新吉。（覺悟して。）まあ、待つて下さい。では、本當の事を申します。

甚藏。うむ、隱すと爲に成らねねぞ。

新吉。否ね、決して隱しは致しません。

甚藏。何うだ。殺したらう。

新吉。へね。些こばかり……殺しました。

甚藏。些こばかり殺す奴があるものかね。女房殺して、一體いくら金を取つたんだ。

新吉。いくらにも、何にも金なんか取りは致しません。

甚藏。嘘を吐くな。金を取らねねものが、何て殺した。懷に澤山有つたらう。

新吉。御冗談を……。何も有りは致しません。

甚藏。有ると思つたのが、無かつたのか。

新吉。さうぢやムいません。あれは、實は、私の女房なんでムいます。

甚藏。此ん畜生……何て女房を殺したんだ。他に手前が浮氣でもして、邪魔に成るから殺したのか。

新吉。否ね、左樣でも無いので。

甚藏。ぢやあ、何ういふ譯だ。

新吉。困りましたなあ。どうも仕方がムりませんから、殘らず打明けてお話ね致しませう。あなた、決して口外をして下さいますな。

甚藏。其處が兄弟分だ。心配するなよ。

新吉。大丈夫でムいますね。では申上げますが……實は私も、初めから殺す氣も何もなく、連立つて彼處まで參りますと、ふと、彼れの顏が幽靈に見ねましてな。

甚藏。なに、幽靈だ……。

新吉。それが、かっ始終、私の身體に附纏ふて居りますので……。

甚藏。薄氣味の惡い事を言ふなよ。一體何が附纏つて居るんだ。判然と、言へよ。

新吉。宜しゆうムいます。それでは洗ひ浚ひお話をしてしまひます。何をお隱し申しませう。私は此間まで、根津七軒町の、富本豐志賀といふ、女師匠の家へ、食客をして居りましたが、三十を越して、物堅いと評判を取つて居た、其の師匠と、ふと心得違ひを致しまして……それからは夫婦同樣、ぶら〳〵一緒に居りますうち、稽古に參ります弟子娘の中で、惣門内の羽生と申す、小間物屋の娘が、その……私に、思ひをかけて居るやうに、師匠の目には見ねますので……。

甚藏。厭な畜生だな。手前の惚氣を聞いてるのぢや無ね。女を殺した譯を聞いてるんだ。

新吉。それがあなた……此の話から致しませんこ分りませんので、……それから師匠が何かにつけて、嫉妬をやきまして、何も怪しい事もないのに、氣をわく〳〵する處から、初め、眼の縁へボツリこ腫物が出來まして、それが段々に恁う腫れ上り、終ひには、片鬢の毛が抜上り、こんな顏に成りまして、（手眞似で仕方をする。）それで居て、毎日毎晩のやうに、私の胸ぐらを取つては、悋氣を致しますのでそれが怖さに居たゝまれず、遂々其處を駈出しました、其後で、師匠は狂死に亡くなりましたが、こゝに一つ、不思議な事がムいましたので……。

甚藏。不思議たあ、ごんな事だ。

新吉。死んだ筈の其の師匠が、私の出先へ迎ひに來ましたり、歸さうこ思つて駕へ乘せますこ、何時の間にか、駕の中に居なかつたりして、薄氣味の惡い事が澤山ムいましたよく〳〵私を恨んで死んだこ見にまして、新吉こ夫婦に成る女は、七人まで、取殺すこいふ、書置が見つかりましたので……。

（新吉は我こ我が詞に、怖氣立ちつゝ、話を續ける。此の中に又、雨の音が聞にてくる。甚藏もゾツこして）

甚藏。あゝ、何だか、恁う、うすら寒く成つて來たな。

新吉。こころが、其の小間物屋のお久こ申す娘が、繼母の爲に、始終苛られるのが辛さに、此の羽生村に居る、伯父を尋ねて行つたなら、二人で世帶も持てやうから、ごうか連れて遁げて呉れこ、賴まれましたので……そんなら下總の田舍へ行き、夫婦に成らうこ約束をして、出て參つたのでムいます。

甚藏。ふむ。それから如何した。

新吉。昨夜は松戸の宿屋へ泊り、先刻あの土手へかゝりますこ、雨は降り出す、日は暮れる……。鼻をつまゝれても知れないほごの暗の中で、途端に落て居た、鎌の刄先に躓きまして、お久の膝へ血がべつこり……それを介抱して居りますこ……（いひかけて、ふこ思出し、ゾツこして眼を閉る）

甚藏。如何したんだ。

新吉。へゐ。その、お久の目の下へボツリこ吹出物が出來たこ思ひますうちに、急に片面が腫れ上り、死んだ師匠を其の儘の、怖い顏に成りまして……もし、新さん、私やこんな顏に成りましたよ……。

甚藏。（怪こして。）ゐつ、何だ。何ていふ氣味の惡い聲を出すんだ。

新吉。へゐ、ごうか御免なすつて……。それで、かう膝へ兩手を突いて、私の顏をじつこ見詰めた恐ろしさに、もう我を忘れてしまひ、無我無中に、手に障つた鎌で、殺す氣もなく、お久を殺してしまひましたが、後で顏をよく見ますこ、矢張りお久の綺麗な顏で……。

甚藏。ふうむ。左樣か。
新吉。思へば、矢張り豐志賀の書置にある通り、夫婦約束をした女を、私の手で、取殺したかと身の毛もよだち、ゾッとした襟元を、誰やら知れず引攫まれ、もう一生懸命に振解いて、此處まで遁げて參りましたが、泊めて頂かうと思つた、此の一軒家が、あなたの家とは……惡い事は出來ませんね。
甚藏。それぢやあ、狂死をしたといふ、其の師匠が、手前の身體に祟つて居るのだな。
新吉。へゐ。私の身體には幽靈が放れないのでムいます。
甚藏。氣味の惡い奴が飛込んで來たな。それは然うとしておいて、本統に、金はいくら取つたゐ。
新吉。ですから、金なんぞは取りやあしません。
甚藏。本統に、盜つちやあ來なかつたのか。
新吉。ごう致しまして……。昨日、師匠の墓詣りに、卵塔場で、思ひがけなく落合ひまして……。
甚藏。こん畜生……氣味の惡い事ばつかり言やあがる。
新吉。否ゐ、本統でございます。二人が墓場でオヤお久さんマア新さん……といふやうな譯で……。
甚藏。そんな事は、どうでも好いや。
新吉。持つて居たのはお花と線香……後はほんの、二人の小遣ひばかりで松戸へ一晩泊りまして、些とばかり殘つて居ります。
甚藏。何の事だ。それぢやあ手前は、一文無しかゐ。
新吉。へゐ。
甚藏。厄介な野郎だ。錢も持たずに、幽靈なんか脊負つて來やがつて……まあ仕方が無ゐ。俺も世間から、蝮と呼ばれるほど、曲つた人間だ。類は友を呼ぶといふから、是から俺が遊んで歩く間、お前は此處で留守居をしながら、荒物や駄菓子でも賣るが好い。
新吉。へゐ。では、お置きなすつて下さいますか。
甚藏。別に何も、盜まれるやうな物は無えが、是でも一軒の主人だから、お前が留守居をして呉れりやあ、いつ何時歸つても、火もあるし、茶も沸いて居るといふ譯だ。俺も安心して外へ出られる。
新吉。有難うムいます。其のお詞を伺ひまして、私も大安心を致しました。（ホッとして四邊を見る。）では、早速てムいますが……兄さん。
甚藏。何だ。
新吉。別に、寒い譯ぢやあムいませんが、炊物をごうか、もつと焚いてお貰ひ申したいもので……暗いと何となく、陰氣になつて不可ません。
甚藏。成程、着物もまだ濡れて居たな。慥か土間の隅に、粗朶があるから持つて來ねゐ。

新吉。へゐ。（彼方を透かして見て）彼所は何だか、眞暗て……。（躊躇する）

甚藏。眞暗だつて、猫の額見たやうな家だ。手探りでもすぐ分らあ。

新吉。へゐ（怖々土間へ下りて）兄さん。こゝらでムいますかね。

（新吉が手探りして居るうちに、急に大きな音がして、何物かバタンと倒れる。新吉はワッと言つて、柱へ縋る。其の聲に甚藏も飛上る。）

甚藏。何だ、何だ、ゐゝ、膽を潰した。

新吉。（土間の奥を指して）彼所に何だか、白いものが……。

甚藏。何に、白いもの……。

（甚藏は立つて、怖々土間の一隅を透かし見る。途端に白犬が戸の透間から、表の方へ飛出して行く。）

甚藏。ゐゝ、びつくりさせやがる……。おい、白犬が這入り込んで居たんだよ。

（甚藏は、土瓶の茶を一口飲んで、胸を撫下す。新吉もホッと息をつく、又ひとしきり、雨が強く降り出す。）

——幕——

第三場

舞臺の所々に白張の提灯、塔婆、石塔など。一の方に、茂つた木立を透かして本堂の白壁が見えて居る。下手に要垣、墓場へ出入りの木戸、其の前に車井戸、柳の立木などがある。中央のやゝ小高き墓所には、丹僧の了念が、寺男の幸助を對手に、新しい卒塔婆を立てゝ居る。其の前には、村の老人達が七八人、珠數を手にして拜んで居る。本堂の方からは、銅羅や木魚の音が聞こえて來る、前幕より數日後の正午頃。

了念。お前樣方も、お詣りが濟んだら、本堂の方でおこきが出ますから、直に彼方へお出でなさい。

甲。へゐ。それは有難い事でムいます。

乙。だがなう、三藏ごんの姪つ子の初七日だこいつて、態うやつて皆あ招いて、馳走べゐするてゐのは、却々ゑれゐ事で無ゐか。

丙。俺が婆樣あ、久し振りで米の飯い食へるこいつて、喜んで居りますだ。

幸助。然う皆の衆が、喜んで居なさるのが、何よりの功德こいふものだ。折角の供養だから、早く行つて、澤山よばれさつしやるが好い。

了。では、御造作に成ることしやうか。

（了念と幸助は先に立ち、皆々續いて、上手へ行かうとする此時車井戸の蔭から新吉が出て、後から行く二三人を呼止める。）

新吉。もし、もし。

了。（振返る）あゝ魂消た。お前は一體何處から來ただ。

新吉。私は先程から、井戸の向に居りました。
丙。誰も居ねゐと思つたが、何だか。
新吉。少々承りたうムいますが、此のお墓は、慥か、此の間川端で殺されて、御檢死が濟んで、お葬りに成りました娘子さんのお墓所でムいますね。
丙。然うでムいますだ。
新吉。さうして、今日の御法事は、何誰が成さるのでムいますね。
甲。それは今も話して居た通り、此の羽生村で、三藏ごんご言つて、質屋をして居て、其上田地の七八十石も持つてござる、物持の旦那樣がさつしやれたのだ。
乙。此の間、川から引揚げられた娘つ子の、守りの中にあつた書附から、自分の實の姪だといふ事が分つたので、今日は其の娘つ子の、初七日の法事なんでムゐますよ。
丁。お前樣あ又何て、そんな事を聞くのだね。
新吉。否ゐなに……私は、無靈に當るお咒詛に、さういふ佛樣に、花やお線香を、上げさせて頂きたいのでムいます
丙。はあ。さういふ事だら、さあ〳〵、澤山上げて下せゐ。
新吉。へゐ、へゐ、有難うムいます。
（吉は呵伽桶へ井戸の水を汲入れて、墓の前へ持つて行き香花を供へて叮嚀に拜む。人々は皆本堂の方へ立去る。）
それと入れちがひに、奥の方から、名主の惣右衛門と、妾のお賤に、馬方の作藏が附いて出て來る。）
惣右衛門。お賤や。彼の墓が、お前の見たがつて居た、累の墓だよ。
お賤。名高い累の墓だといふから、もつと大きいのかと思つたら、大層小さなお墓ですねゐ。
作藏。いくら小さくつても、あれが二十何年も祟つたからね執念深ゐ阿魔もあるものだが、願掛が利くてえので、村の者も墓詣りに來りやあ、序に線香の一本も上げるのだよ。
お賤。さうだこね。道理でお線香が、澤山上つて居ましたよ
惣右衛門。どんな道樂者でも、女房があの墓へ願掛けすれば亭主の浮氣はパッタリ止むこよ。
お賤。まあ嫌だね。私なんぞも、陰で願掛をされたなら、旦那に捨てられるかも知れませんねゐ。
惣右衛門。なに、お前は別者だ。家内や悴までがあゝやつて承知の上の事だもの。些とも案じる事はないよ。
（此のうちに作藏は、ふと新吉を見て）
作藏。やあ。お前は、甚藏ごんの家に居る、新吉ごんでねゐか。
新吉。おゝ、作藏さんかゐ。
（いふ醫に、お賤も思はず新吉の顏を見る。）
お賤。おや、お前さんは……もし違つたら濟みませんが、慥か江戸の本石町で、松田こか桝田こかいふ、貸本屋に居

なすつた新吉さんぢやありませんか。
新吉。へゐ。仰有る通り、新吉でございますが……さうしてあなた樣は。
お賤。（進み寄る。）まあ、新さん……。嫌だねゐ。すつかり忘れておしまひなんだよ。私や、深川の櫓下で、紅葉屋にゐたお賤ですよ。
新吉。あゝ、さう〳〵……お賤さんでしたね。私も、何處かでお見かけ申したやうだ……こは思ひましたが……。
お賤。不思議ぢやありませんか。ねゐ、旦那。この人は、江戸に居た時の知合なんですよ。恁うしてみると、何處でごんな人に逢ふか判らない……本統に、嘘は吐けないものですねゐ。（又新吉にむかひ）さうして新さんは、何時此方へ來たんですゐ。
惣右衛門。お賤や。お前、墓場なんぞで、立話でもあるまい江戸の人こいへば、お前も懐しからうから、作藏に案内をさせて、家まで遊びに來て頂いたら、好いぢやあないか。お賤。旦那。ごうか然うしてお呉なさいよ。一寸、作さん他に何も、見る物も無いやうだから、私やもう、是て歸るよ。
作藏。左樣かね。ぢやあ後から二人行きますだ。
惣右衛門。新吉さんこやら……。私は、名主の惣右衛門こいふ者だが、此女の家は土手下で、いつも話木手を欲しがつて居るこころだから、何うか一寸々々、遊びに來てやつてお呉んなさい。
新吉。有難うムいます。お詞に甘へまして、又、お邪魔に上らせて頂きます。
お賤。（ふと空を仰ぐ。）おや、すつかり曇つてしまつたよ。ぢやあ私達は、一足先へ行きますから、作さん、後から一緒にお出でよ。新さんも、屹こ待つて居ますからね。
（お賤は愛嬌をこぼしながら、惣右衛門こ打連れ、早足に下手へ入る。其後を見送つて）
新吉。作藏さん。今の御新造は、名主樣の閨者かね。
作藏。左樣だよ。本家の御新造樣や若旦那も話合ひで、別に土手下へ、江戸風の家作つて置つてあるだが、旦那が行かねゐ晩にやあ、淋しいから遊びに來いつて、迎へが來るので、俺が時々出かけるだよ。
新吉。さうかね。櫓下ぢやあ、却々賣れた姐さんだから、定めし面白からう。
作藏。そりやあ江戸者だけあつて、如才の無い女子だよ。まあ、俺こ一緒に行つて見るが好えだ。
新吉。用事があつて、今すぐには行かれないが、晩に成つたら、お前の家まで誘ひに行かうよ。
作藏。ぢやあ、晩げに屹こ、待つてるだよ。（空合を見て）おや〳〵、こりやあ降るかも知れねゐ。

（作藏も早足に下手へ入る。新吉は四邊を見て）

新吉。成行。世間こいふものは、廣いやうで狹いものだな。

（新吉は鼠りがけに、再びお久の墓の前へ蹲いて到む。折から上手より、三藏の妹おるいは、雨傘を持ち、下女のおせなを連れて入つて來る。）

おせな。おや、お前さんは、こゝらで見た事の無い人だが……

……此のお墓に、緣引でも有るだかね。

新吉。否い、一寸、無靈のお呼吐に……樒し葉を頂戴して居りました。

おせな。へい、樒し葉がね。お孃樣。妙なお呪吐てムいますね。

（おるいは返事もせず、新吉に見惚れて居る。此時、墓の下から、一匹の蛇が現はれ、鎌首を立てゝおるいの足許へ這寄つて來る。）

おせな。あれまあ、大い蛇が……。（孃の足許を打す。）

おるい。あれね。

（おるいは、一歩退くはづみに、思はず新吉の手に縋る、新吉は片手の柄杓で、草の中へ蛇を追込む。おせなも雨傘で叱つ叱つと大地を叩く。おるいは心阿いて、新吉の手を放す。

おるい。まあ、私でしたこと、が、餘りの怖さに、我を忘れてあなた。何卒御免あそばして。

（おるいは恥しゆに、面を染めて會釋する。新吉も、一寸極り惡さうに小腰をかゞめる。）

新吉。いい。ごう致しまして……。さぞ吃驚なさいましたらう。

おせな。まあ、お前さま。有難うムいましただ。此の邊で蛇なんか、珍しくもムいませんが、お孃樣あ此の間まで、長らく江戸のお屋敷へ、御奉公をして居なすつたから、草深へ田舍道は、蛇が嫌だからつて、滅多に出なすつた事あ無いだが、今日は御緣の深い、佛樣の初七日で、それで墓詣りにお出でなせいましただよ。

新吉。それではもしや、お孃さまは……

おるい。あい。三藏の、妹のるいでございます。

新吉。成程、血筋は爭はれないものだ。

（うつかりおるいの顏を見つめる。）

おるい。いつ。

新吉。いい、なに……血筋のつながるお孃樣のお詣りで、佛樣も嘸お喜びでムいませう。

おるい。ほんに、早うお參詣を致しませう。

（おるいは淑やかに墓前へ蹲く。雨がぱら〳〵と降つて來る

おせなはおるいの後から、傘を開いてさしかける。）

おせな。あれ、遂々降出して參りましただ。

おるい。まあ、困つたねい。（立上り、新吉の方を見て）もし

あなた樣は、雨具の御用意も無い御樣子……。つひ其處まで、此の中へ……。

（おるいは下女の傘を取つて、恥しさうに、新吉の方へさしかける。）

おるい。せなや。お前はお寺樣でお借り申して、後からお出でな。

（下女は呆氣にとられ、仕方なく、前掛を解いて頭へ被る。）

――幕――

二　幕目

第一場

舞臺は四間の間常脚の二重、上手の一間は障子屋體。軒に紺暖簾をかけ、正面奥に出入の大阪格子、上の方に帳場格子、其の後に戸棚、羽目に帳面などかけてある。下手には、質屋の入口と、普通の入口とが別々に出來て居る。前幕より一月ほど後の午後。

（幕明くと、帳場では、番頭の金兵衛が帳面を調べてゐる。傍に手代の助八と丁稚の長吉が、入質を積上げ、質札を讀んで居る。）

助八。（品物を片附けながら）それは然うと番頭さん。今日はまた、一度も奥へ顔を出しませんが、お孃さんの病氣は、ごんな模樣でムいますね。

金兵衛。さあ。私も毎日、それか案じられて成らないのだが何こいつても年頃の娘を、あゝして何時までも獨身で置くこいふ、旦那の心持が解らないのだ。江戸屋敷から下げたからは、一日も早く此の番頭と、めあはさうとはさつしやれずに、何時までも便々と、よそ外の聟穿鑿をしてばかり居なさるから遂々あんなブラ〳〵病に、かゝつてしまひなすつたのだ。

助八。でも、お孃さんと番頭さんぢやあ餘り釣合が悪すぎますね。

金兵衛。なあに、人は眉目より心懸が大切だ。明けても暮れても商賣大事と、奉公人根生を捨てゝ、此の身代ばかりを延ばして居る私だもの。こんな家の爲に成る花聟は、先づ唐天竺を探しても、他に二人と無い筈だ。

長吉。本統に左樣だ。番頭さんのやうな、自惚れの強い人は唐天竺を探しても、他に二人と無い筈だ。

金兵衛。にゝ喧しい。小僧の癖に、默つて居ろ。

長吉。へゐ。

（金兵衛は忌々しさうに長吉を叱る。此時向から、土手下の甚藏が、新吉と連立つて出て來る。甚藏は、素肌へ、大輪に抱若荷の紋の附いた、馬の腹掛を卷き附け、手拭で捲いた草刈鎌を、片手に下げて居る。）

新吉。ねゐ。兄さん。後生だから、そんな見つともない眞似は止して下さい。

甚藏。何だなあ。左樣な意氣地の無ゐ事を言つて、此の世智辛ゐ世の中を、どうして渡つて行かれるものか。

新吉。でも、左樣な物を振廻して、ひよつこ、敷をつゝいて蛇でも出すやうな事に成ること、私は此の土地に、居られなくなりますから……。

甚藏。心配するな。其樣なドヂを踏むやうな俺ぢやあ無ねに。好いから手前は、歸れ、歸れ。

新吉。ごうして此の儘、歸れるものかね。

甚藏。歸れなきや、附いて來い。

（兩人は舞臺へ來る）

甚藏。手前、此處で待つて居て呉んな。

新吉。待つては居るが、成るだけ穩にねに。頼みますよ。

甚藏。好いつてゝ事よ。

（新吉は詮方なげに、其のまゝ軒下へ佇んで居る。甚藏は、質屋の口からずつと入る。）

甚藏。へい。御免なさい。

助八。誰だに。おゝ、甚藏ごんか。

（甚藏の顏を見て、一寸厭な顏をする。）

甚藏。へゝ。助八さん、お久振りで……番頭さんも、御機嫌よろしゆう……。（かまはず店へ上つて座りこむ。）もし番頭さん。何もお前さん、俺が來たからつて、其樣な苦虫を食潰したやうな顏をしないでも、好いぢやありませんか。今日は旦那に折入つて、お目に懸けてゝ品物を持つて參りやしたから、何卒逢はしてお呉んなさい。若しもお留守なら、お歸りまで、店先をお借り申して居りますよ。

（甚藏は聲高に言ふ。主人の三藏は、上手の障子を明けて立出る。）

三藏。何だ甚藏。病人が寢て居るのだ。些こは靜かにして呉れぬか。

三藏。（俄に居住ひを改めて）これは旦那。ごうもすつかり、御無沙汰をしてしまひまして……。今日は好くまあ、逢つて下さいましたね。

三藏。實は私も、お前に逢ひたいと思つてた處だ。お前を呼んで、聞いて見たいと思ふ事があつたのだが……。それは兎も角、甚藏。顏を見る度にいふやうだが、もう好い加減に、馬鹿を止めたら如何なものだ。大分、村中の評判が惡いやうだぞ。

甚藏。へゝ。何うもつひ……生附きで、憎まれ口を利くもんだから、誰も構つちや呉れません。お前さんが、時折意見を言つてお呉んなさるから、一つ眞面目に何か初めやうたあ思ひますが、借金ばかりで資本は無し、如何する事も出來やあしません。取分けて此の二三日は、何うにも斯うにも法が付かねゝんて……物事はヘマに行くし、此通り、人間が馬の腹掛を借りて、圖々しく人の家へ來るやうに成つちや、から意氣地がありませんや。處で些こばかり……質を取つてお貰へ申してゝと思つて、やつて參りました。

三藏。そりやあ取つても構はないが、品は何だ。
甚藏。へゐ。詰らねゐ、こんな物でムいます。
（甚藏は鎌を出して三藏の前へおく。助八と金兵衛は苦々しげに目を見合はせる、此のうちに下手から下女のおせなが買物の包みを抱へて歸つて來る。ふと、新吉の立つて居るのを見て驚き、挨拶をして、又何か呟く。やがて、當惑顏の新吉の袖を引張つて、別の入口から無理に連込んでしまふ。店の方では、三藏が鎌を一寸見て）
三藏。何だ。鎌ぢやあないか。
甚藏。へゐ。鎌でムゐます。
金兵衛。こんな物を持つて來たつて、什樣が無い。新しく買つた處て、百か百五十が關の山だ。
三藏。甚藏。それでいくらばかり欲しいのだ。
甚藏。二十兩なけりや追付かねゐんで……旦那、ごうか是て二十兩、お貸しなすつてお呉んなせゐまし。
金兵衛。おい、おい、甚藏ごん。又極りを言つてゐね。それだからお前は不可ないのだよ。五十か百で買へるものを持つて來て、二十兩貸せなんて……強請見たやうな事を言つちやあ、困るぢやないか。
助八。此樣な鎌を質草にするなんて……冗談ぢやあ無い……だから村中で嫌はれるのだ。
甚藏。お前達にやあ解らねゐ。默つて居て呉んな。（三藏の顏をじつと見る）ねゐ旦那。こいつを只の鎌と思つちや不可ませんぜ。百姓が使ふ只の鎌たあ、些とばかり違つて居るんで……。
金兵衛。局鹿な事を言ひなさい。誰が見たつて、百姓が使ふ草刈鎌だ。おまけに大分錆が附いて居る。
甚藏。（ニヤリと笑つて）番頭さん。其の錆た處が價値なんでまあ手に取つてよく見てお呉んなさい。
（金兵衛は不思議さうに、鎌を取上げて、つく〴〵見る。）
金兵衛。おゝ、是は家の鎌ぢやあないか。此の柄の處に、丸の中に三の字の燒印が押してある……此の燒印が何よりの證據だ。
助八。それは此の間。與吉に持たして遣つた鎌だが、ごうしてお前の處に有つたのだ。
甚藏。それを言つちやあ、實も花も無ゐ。旦那ゐ。平素の馴染甲斐に何にも言はず、此の鎌を、二十兩で買つてお呉んなせゐ。店に依つちやあもう些と、好い値に賣れるかも知れねゐがそんな野暮は言はねゐから、只私の親切氣を、器用に買つてお呉んなせゐまし。
三藏。これ、甚藏。先刻から默つて聞いて居りやあ、妙に絡んだ物の言ひやう……。たとへ其方にゐれほどの、譯が有るかは知らないが、こんな鎌を二十兩で、賣らうなどは方外な話だ。

甚藏。もし、旦那。七つ煩く言ふだけ無駄と思つちや居たが然ういはれりやあ、此方でも、嫌な文句を並べにや成らねわ。打撒けて言やあ其の鎌は、而も先月土砂降りの晩、人殺しのあつた絹川土手の、ボサツカの中へ落ちて居たのを通りがゝりに拾つたんだが……柄にベツトリと血染の附いて居るのは言はずと知れた曰附さ。此儘お上へ届けたら、若しやお前さんが係合に……さ。成るめわものでも無わと思ひ、平素お世話に成り勝の、御恩返しと誰にも言はず、今まで隱して置いたんだが、さも無わ時には旦那の腰へ、厭が應でも縄が附くんだ。

金兵衛。おい。甚藏ごん。馬鹿も休み休み言ふが好い。何で旦那が人殺しなんぞ。はゝゝゝゝ。積つて見ても知れてゐる。

甚藏。さあ其所だ。成るほど世間ぢや、善い人だと、お前さんを褒めちやあ居るが、多くの中にやあ、五人八人……あ

あ工面が好く成には、些こは惡事もして居るだらう……位の噂をする奴もある。殺した後で、世間體を作る爲に、姪こか何こか名を附けて、死骸を引取り、こひ葬ひをしたのだらうと……さ、訝しく勘繰る奴があると不可ねわから、他人の手に懸からねわうち、私が恁うして持つて來たのさ

まあ、假に十日でも二十日でも止められて、引出された時にやあ、それ相當の入費が懸ると算用して、こいつを二十兩で買つてせわお吳んなさりやあ、私もふつつり博奕を止め、堅氣に稼ぐ了見だが……ねわ、旦那。もう一度こつくりと、考へ直しちや下さいませんかっ。

三藏。そんならち前は、彼の娘を私が殺して、死骸を引取り葬りでもしたと言ふのだね。

甚藏。まあ、旦那も滅法界に氣が早いね。私がさう思ふ位なら、疾うに此の鎌あ振廻してしまひまさあ。例も小遣へを貰つたり、名主の手前も何だ彼だと、繕つてお吳んなさるお禮心に、一寸お目にかけたばかりさ。嫌だとお言ひなさるなら、たつて無理にやお賴みしません。ごれ、他の店を當つて見やうか。（鎌を持つて立上る。）

三藏。まあ待て……。只取られるやうな二十兩だか、印の鎌が此方の災難だ。蝮と仇名のお前から、喰付かれたと諦めて……よし、言ひ値で買つてやらう。

甚藏。わッ。ぢやあ綺麗に二十兩で、こいつを貰つてお吳んなさるか。

三藏。其代りに、此方からも、折入つて賴みがある

甚藏。先刻。私に逢ひてわと仰有つたのは、其の事なんでムわますか。

三藏。他でも無いが、お前の手許から、私の家へ、是非ともゆづつて貰ひたい物がある。

甚藏。さう器用に捌けてお吳んなさりやあ、他に身に附いた

物も無に、私の事だ。ごんな物でもお望み次第、差上げるこ致しませうよ。

三藏。其の望みの品こいふのは、實は此の間、法藏寺で一寸見かけたのだが、お前の弟分になつて居る、新吉こいふ若い男を、妹の聟に貰ひたいのだ。

甚藏。へゐ、あの新吉を……。妙な者に目をお附けなさいましたね。

三藏。如何だな。お前さへ、うんこ承知をして呉れゝば、新吉ごんの方へ又、何こか改めて、話を持つて行く心算だが……。

甚藏。いや、飛んてもねゐ、不承知處か、大承知でムゐます。あの野郎、お嬢さんの聟に見立てられるなんて……。こいつは有難に（心付いて）おゝ左樣だ。もし旦那。其の新吉は私こ一緒に來て、先刻から表に待つて居るんで……。

三藏。それは恰度好い都合だ。まあ、兎も角もお前から、此處へ呼んで貰ひたい。

甚藏。へゐ。宜しうムゐますごも……。

甚藏。新や。新吉……。何時の間に、何處へ消ゐやあがつたか。はてな。おい、新吉……新吉……。（あちゝこちゝ探し廻る。）

（此の間に、奥から下女のおなせが出て來て、三藏に何か呟き門口の方へ來て）

おせな。甚藏ごんや。新吉ごんは、疾うに此方へ上つて居るだよ。

甚藏。なに、其方に居る少し變だな。

（甚藏は元の處へ歸つて、怪訝な顏をする。三藏は、おせなへ何か目で知らせる。）

おせな。へゐ。そんなら直に、連れて來やすよ。

（おなせは再び奥へ入り、直に、嫌がる新吉を引張つて來る甚藏はびつくりする。）

甚藏。何だ、新吉。手前今まで奥に居たのか。圖迂々々しい野郎だな。へゐ旦那。是が私の弟分、新吉こいふ野郎でムゐます。（新吉にむかつて）おい、こちらが御當家の御主人、三藏樣だ。御挨拶を申上げねゐ。

新吉。（叮嚀に手を突いて）初めまして……私は新吉こ申す不調法者で、どうぞお見知りおかれて下さいまし。

三藏。いや、さう御叮嚀な御挨拶では痛み入ります。まあ、お手をお上げなすつて……（新吉の顏を見て）成るほど、是では煩ふ筈だ。いゐ、なに、私こそ、此後は御別懇に願ひます。

甚藏。旦那。そんな四角張つた事あ不可ませんや。まあ、話は早い方が好い。おい新吉。こちらの旦那の妹御は、おるいさんこ言つてな、江戸で十年も、屋敷奉公をしたお方で、御器量は減法界好いし、女の仕事一通りは、何でも仕

込んでお有んなさるんだ。處で其のお嬢さんの御養子に、手前を貰へてにと、恁う日那が仰有るんだ。此の畜生め、ごうだ、驚いたらう。其れも是も皆此の阿兄さんのお蔭なんだ。有難く思ひねに。なあ、好い女房を持つのだ。手前の運が向いて來たんだ。お嬢さんは、好い女だぜ。

新吉。其のお嬢さんならよく存じて居ります。

甚藏。な、何だと……。

新吉。たつた今、お目に懸つて居りました。

甚藏。何だ。手前もう逢つてしまつたのか。素早に奴だな。

日那。此の通りでムします。此奴あお役に立ちますぜ。

（此時、上手の障子を細目に開けて、おるいは此方をソッと覗く人々は心附かず）

三藏。これ新吉ごん。さういふ譯だから、改めては言ひませんが、定めし氣にも入るまいが、實はこなたを見染めた妹病み續けて居るのを不憫と思ひ、何と、承知をしてやつては下さるまいか。

助八。其れでは、お嬢さんの長煩ひは、戀の病でムいましたか。

金兵衛。思へば〳〵、忌々しい事た。

甚藏。（横手を打つ）こいつは豪氣だ。さあ新吉。何をうぢうぢして居るんだ。

かういふ事は遠慮は要らねえ。さつさと承知をするが好い

新吉。兄さんまでが、さう言つて下さるなら、何て否やがムいませう。何分よろしく、お願ひ申します。

三藏。では、異存もムらぬな。やれ〳〵是で私も落ちつきました。

（おるいは、此の話を聞いて障子を閉める。）

三藏。そんなら甚藏。何れ改めて媒酌人を立て、吉日を選んで結納をする心算だが、差支へはなからうな。

甚藏。何しろ二人きりの兄弟で、別に面倒な事は有りませんが困つた事にやあ、此野郎の身體に少しばかり……借金があるんで……

三藏。おう借金が……。

甚藏。（面目なげに）へえ、誠にごうも……。

（新吉は驚いて、甚藏の手を引張る。甚藏はそれを制して）

甚藏。好いつて事よ。心配するな。處で旦那。こちらが堅氣で無けりやあ構はねえが、此の野郎が來る早々、諸方から借金取りが押掛けて來て、新吉々々と居催促でもされた日にやあ、此の野郎も當座の事で、極りが惡く、皆の手前も居たゝまらねえで、駈出すやうな事でもあると、濟まねから、結納をする前に、奇麗さつぱり、借金を片附けてお呉んなさりやあ好いが……何しろ、私が請人に成つて居るものだから……。

金兵衛。此奴、何處まで虫が好いのだらう。

三藏。まあ、番頭ごんは默つて居て下さい。然うして、其の金は何の位だね。

甚藏。何の位つて……なあ新吉。こつちへ縁附いてから、彼奴等に、押掛けられちやあ面目ねえやな。其の極りを附けて貰ふんだから、遠慮なく、借金の高を言ひねえ。よう。借金の高をよ。

新吉。否え、私は、借金なんて……。

甚藏。無え事があるものか、斯う成りやあ、何も隱す事あ有りやあしねえよ。

新吉。でも、借金なんか……。

甚藏。解らねえ事を言ふな。此間も、何だかごて〳〵言つて來たぢやあ無えか。なあ新吉。手前も今迄とは違はあ。三藏さんの弟に成るんだ。可愛い妹が、塩梅が惡く成るほど、思ひ詰めた、聖を貰ふさい先だ。借金が有るなら有ると、打明けりやあ、片附けて貰へるからよ。さあ、判然言ひねえといふに……(頻に目顔で呑込ませる。)

新吉。え、、成るほど……如何にも、借金がムいます。却々ムいますので……。

甚藏。ぢれつてえな。縮て幾らに成つて居るんだえ。

新吉。左樣……五……兩ばかり……。

甚藏。何だ、いくら……五十兩だ。けれども其のうち二十兩ばかりは、俺が目が出た時に返して遣つたから、あと、三十兩ほど、殘つて居たつけな。

三藏。三十兩か。まあ仕方が無い。

(三藏は、番頭に命じて、金を出しにやる。)

三藏。恁う成れば、どうせ乘りか、つた船だから、鏈の代とも、封金で五十兩……さあ慥かにお前に渡すから、其の代りに甚藏。評判の惡いお前が、親類のやうな氣に成つて、出入りをされちや困るから、新吉ごんとはこれ限り、縁切に成つて貰ひたい。

甚藏。宜しうムいます。何も弟の出世のためだ。縁を切つて差上げやせう。

三藏。大丈夫だな。後で、いざこざは有るまいな。

甚藏。私も男だ。斯う何も彼も、器用に埒を明けてお呉んなすつた上は、是から後も、何て苦情を言ふもんですか。ぢやあ、お金は頂戴致します。(三藏の出した金をしまふ)お い新吉。お前からも、好くお禮を申して呉んな。

新吉。飛んだ御心配をかけまして……有難うムいます。

甚藏。おい新吉。かう事が極りやあ、何かの支度があらあ。是で一先づ、お開きといふ事にしやうぜ。

三藏。では甚藏。何分共に賴むだぞ。

甚藏。(胸を叩く)ね、もう、ぐつと呑み込んで居ります。それぢやあ旦那。皆さん、大きにお邪魔を致しました。

(甚藏が先へ立ち新吉もそれ〴〵會釋をして、戸外へ出る。)

甚藏。新吉。手前ぐれは、仕合はせの好い奴は無は。是と皆阿兄さんのお陰だ。有難く思ふがいゝ。

新吉。此の御恩は、決して忘れは致しません。

甚藏。屹と忘れるなよ。それぢやあ是から前祝ひに、何處かで一杯やつて行かうか。

新吉。だつて兄さん。左樣な形をして。……

甚藏。見つとも無はこても言ふのか。なに構ふ事あ無は。質屋の妹娘に、見染められやうたあ、思つちや居ねはからな。

（二人は、捨臺辭を音ひながら、向へ入る。）

三藏。さて、斯う事が極つて見ると、是から却々忙しいな。これ〳〵、助八や、一寸おせなを呼んで呉んな。いやいや私から直におるいに話して、喜ばせやう。

（三藏が、いそ〳〵として立上る、途端に、奥の方で、凄まじい物音がして、續いておるいの悲鳴が聞はる。）

三藏。何だ、何だ。何をやつたのだ。

（金兵衛、助八も、驚いて奥へ行く。入れ違ひに、おせなが息急き走り出る。）

おせな。旦那、大變でムはます。今あの窓から、大きな蛇が這込んで、お孃さんが、魂消て逃げさつしやるはづみに、圍爐裡の藥罐を蹴くら返して、頭から、沸湯をうんと浴びなすつただ。

三藏。なに。おるいが火傷をしたといふのか……（そのまゝ其處へベタリと成る。）

（皆々あはてふためくこなし。此の模樣よろしく、幕。）

第二場

六疊敷位に見はる小座敷。茅葺屋根、三方廻り縁、上手肱かけ窓、其の外の軒先に、辨慶が釣るしてあつて、例の鎌がさしてある。上手は、母屋に續いた土藏、又は塀、同年の九月三日の夜、三日月が出る。

（初めは、縁側の障子が閉めてあつて、作右衛門夫婦が今日の媒酌人で、床杯を濟まして、縁先へ腰をかけて居る。幕があくと、母屋の方で、賑やかな笑聲が聞はる。）

作右衛門。なあ婆さんや。姪ごんは、平素から、酒にや弱いからして、ふらく苦しげに見はた喃。

おくわ。なあに、今些この間、あゝして居なさりや、直に醒か醒めてしまふだ。

作右衛門。そりやあ然うこ、床杯も濟んだから、おら達はもう用無しだ。後はお孃さんに、お願へ申しておいて、是でお開きこするかね。

おくわ。ほんに、それが好からうよ。

（二人は、先から立上る。此時奥から、梟鳩唄が聞はて來る。）

唄〳〵目出度いものは芋の種、葉廣く、莖長く、子供あまたにユー

（又一しきり、賑やかに成る。）

作右衛門。未だ却々く、賑やかに遣つてるな。おくわ。例の事だが、新田の傳右衛門さんは……好い聲だなう。

作右衛門。あれで、來年八十八に成るだよ。おくわ。然う成るだかね。だが、彼の聲の壥梅ぢや、まだまだ十年や二十年は生きるべいよ。

（夫婦は語合ひながら、下手へ入る。やがて遠寺の鐘が幽に聞ゆる。座敷の障子を中から開くと、其處には、袴姿の新吉が床の上に起上り、折廻した屏風の外には、行燈を隔て、模樣姿のおるいが、愁然と後向きに俯向いて居る。新吉は、うたゝ寢から覺めた體で）

新吉。あゝ。知らぬ間に、すつかり醉つてしまつたと見ゆる作右衛門殿夫婦の衆に手を取られて、此處へ來たまでは覺ゆるが……。それにしても、おるいさんは如何なされたか。嘸困つて居なさるだらう。

（新吉は、ふと、屏風の外のおるいに氣が附く。）

新吉。おゝ、おるいさん。まあお前、先刻から、そんな處に居たのかね。冗談ぢやあない。夜が更けると風邪をひくから、さあ、此方へ入つてお呉れ。

おるい。あい。（小さく答へて、其儘で居る。）

新吉。極りの惡いはお互ひぢやあないか。それに私は來たばかりで、勝手は分らず、何うも工合が惡くて困る。お前ばかりが便りなのだから……。さあ、そんな處で何時までも……一體何をして居るのだね。

おるい。あの、私は……。あなたのやうな、立派なお方が、こんな處へ來て下すつたのが、もうお氣の毒で〳〵、先刻から、いろ〳〵考へてばかり居りました。

新吉。何を言ふのだね。それは此方でいふ文句ぢやあないか兄貴の口から出放題の、譯の分らない借金まで、拂つて呉れたばかりでなく、私のやうな者を見たゝ、聟にして呉れたお前お兄御。有難いと思ふにつけ、是から先はどんな事でも辛抱して、身を固める了見で居るのだ。ねゝ、おるいさん。何も今初めて、綿帽子をぬいで、顏を見ると言ふ譯ではなし、法藏寺の墓場で逢つてから此のかた、二度三度目の今夜ぢやあないか。何時までも、其樣なにぢらさずに、まあ此方へお出でといふのに……。

おるい。其のお詞は身に染みゞ〳〵、嬉しいとは思ひますが、私は三日と經たない中に、屹度あなたに嫌はれて、捨てられるのに極つて居ります。それを思ふと悲しくて……いつそ、盃を、延ばしたら好かつたものをと……先刻から、泣いてばかり居りました。

新吉。はゝゝゝ。お前は、泣上戸と見ゆるね。見捨てるに、見捨てないにも、今來たばかりで、そんな詰らない事

を言つてさ。私は知らない此の土地で、眞の身寄こいつては無いのだから、お前の方でさへ、惡想を盡かして呉れなけりやあ、死ぬまで傍は離れないよ。

おるい。でも私はねね。こんな顏に成ましたもの……。

新吉。ねッ。こんな顏こは……。

（新吉は氣遣はしげに摺寄つて、おるいの袖を引く。）

おるい。此の間、圍爐裡で火傷をしてこんな顏に成りましたよ。

（新吉は行燈の灯影に、半面火傷で相好の變つた、おるいの顏を見て、あッと驚く。）

新吉。おう……これは……お前、恐ろしい、怪我をしたね。

おるい。あい。（袖を顏に當てゝ、さめ〴〵と泣く。）

新吉。（じつと成る。）そんなら是も、師匠の思ひ……が、あゝ惡い事は出來ないものだ。

おるい。ね、。

新吉。いや、決して、極りの惡い事は無い。緣が有ればこそ斯うして夫婦に成つたのだもの。たゞへお前が怪我をしてごんな顏に成らうとも、其れは前世の約束事だ。見捨てるの嫌ふのゝ、そんな不人情な事はしやしないよ。

おるい。そんなら私が此樣な醜い顏に成つても……。

新吉。何て嫌つて好いものか。眉目形よりの優しい心で、私に盡くして呉れさへすれば、其れが何より嬉しいのだ。

おるい。ね。それは眞實のお詞でムいますか。

新吉。何で嘘を吐くものかね。

（新吉は、我身の惡事を悔悟の情にせめられて、我知らず泣いて居るおるいの手を優しく取る。やがて、ふと何か聞きつけて）

新吉。おや。變な音が聞ねるな。

おるい。ほんに、何やら妙な音が……。

（新吉は立上つて、上手の障子をあけて見ると、軒端の辨慶へさしてある草刈鎌へ、一匹の蛇が纏ひ附いて苦しんで居る。新吉が驚く拍子に、蛇の頭と胴が二つに切れたまゝ、椽側へバタリと落ちる。）

おるい。あれ、又蛇が……。

（おるいは怖さに新吉に縋り付く。此の騒ぎに行燈の灯は消えて、座敷の中は暗く成る。新吉は小脇におるいを抱へたまま軒先の鎌を拔取つて、物狂はしく）

新吉。おのれ、豐志賀……まだ俺に祟りやがるか。

（鎌を振廻して狂廻るうちに、やがて鎌の刄先を緣先の柱へグッと切込む。拔かんとしても拔けぬこなし。おるいは餘りの怖しさに、袖をかざして震へて居る。此の模樣宜しく。幕。）

三　幕　目

第一場

江戸風の風雅なる奥座敷。前に庭、沓脱、敷石、樹木の配置

よろしく、下手に生垣、枝折戸がある。前幕より拾ヶ月後の翌年七月十五日夜。

（幕があくと、座敷の上手に新吉が寝轉んで居る。椽先には馬方の仁藏がほろ酔機嫌で、下女のおみつを相手に酒をのんで居る。）

おみつ。一寸、作藏さん。お前さん其樣に飲んで、今夜の踊は大丈夫かね。

作藏。なあに、駄目な事を言はねねもんだ。いくら酔つても酔はねねでも、踊を踊る段に成つたら、慥かなもんだ。其樣な心配ぶたねねで、もう一本、代りをお廚へ申しますぞ。

おみつ。もう御勘造さんも、お湯からお上りなさる時分だから、もう一本にして置きませうね。

（おみつは銚子を代へに奥へ入る。作藏は其後を見送つて）

作藏。江戸から附いて來たゞけあつて、彼の阿魔つちよも、却々調子が旨ねだね。そりやあ然うと兄い。今だから言ふけれど、先刻は俺あ魂消ただね。

新吉。止せ。彼の話はもう止めなよ。

作藏。でもねね兄い。おるいさんも、三藏ごんのたつた一人の妹で、分家した時分にやあ、物も可成り持つて居ただが、兄いが此處へ、足繁く這入りこむやうに成つてから、未だ一年も經たねねうちに、洗ひ浚ひ、よくもあゞ奇麗淡泊に成つたもんだね。

新吉。そりやあ俺の口前で、彼奴が持つて居た、衣類一具は言ふに及ばず、疊から箪笥まで持出して、奇麗に賣つて終つたからよ。

作藏。だから俺あ考へると、おるいさんが實に氣の毒で成んねねだよ。お前と夫婦に成ると直ぐに子供が出來て、此間無事に、男の子を生んだなあ目出度ねが、兄いは夜泊り日泊りで、一向に構つちや遣りねね。それでも不實なお前を便りにして、三藏ごんとは縁切同樣に成つて終つたから、此頃ぢやあ村方の者も、誰一人だつて寄附かねね。可哀さうに、赤ん坊は虫が出てピイピイ泣立てるし、おるいさんは癇の病で、糸のやうに痩せちまつただが、藥もろく〳〵飲まねねやうだね。

新吉。なあに、彼りやあ皆狂言よ。表向は、縁を切つたと見せかけて、俺の留守に三藏が、一寸〳〵見舞に行つてるなあ、分つて居るんだ。先刻も彼奴の寢床の下から、見つけ出した三兩の金が何よりの證據ぢや無ねか。旨ね處へ歸り合はして、すぐ此方へ捲上げたなあ、とんだ大きな拾ひ物よ。

作藏。放程なあ。斯うしてみると、金は何處から湧いて出るか、知れねねものだね。富貴天に在り、牡丹餅棚に在りつ

て、神道者がいふ通りだ。はゝゝゝ。

（此時、襖をあけて、湯上り姿のお賤が出て來る。）

お賤。隨分長湯をしちまつたよ。新さん、待たせたねね。

（新吉の傍へ座りながら）

ねね作さん。今チラリと聞いたんだが、棚から牡丹餅だなんて、そんな旨い話が、一體何處にあるんだね、

作藏。ぢやあ、今のを聞いたのかね。はゝゝゝ。姐御は却々耳が早いね。

お賤。早いともさ。お前方のこそ〳〵話は、私や身體中を耳にして、聞いて居るんだから……。一寸作さん。お前、私をさし置いて、新さんを他へなんか、連れて行くときかないよ。

作藏。こりやあ魂消ただ。俺が兄いを、他へ連れて行くなんて……。それどころでねね。兄いがお前へ、心中立てこいふものは、そりや普通の事で無ねだ。お賤さんの爲ならば可愛い女房子を打棄つても好ねといふ程の逆上せやうだ。

新吉。おい、作、手前は醉ふと、大きな聲を出して困る、些と靜かにするが好い。

作藏。靜かにだつて、俺あ商賣が馬方で、始終、野良で話いしつけて居るだから、遂ひ聲が大く成るだ。大丈夫だよ。田や畑はかけ離れて、夜に成りや、人つ子一人通らねね、土手下の一軒家だ。

お賤。好いよ。作さんは、醉つた處が面白いのだよ。罪が無くつて、本統に慾の無い人だよ。

作藏。なに、慾の無ね事あねね。却々これで慾張つてるだがごつちかと言やあ、足癖の惡い馬あ曳張つて、下坂あ歩くよりも、兄いと一緒に此行へ來て、斯うやつて、醉つてる方が好いだからな。

お賤。まあ、お前も此頃は、口前が旨く成つて、却々隅へは置かれないねね。

作藏。だから、眞中へ出て飲んで居るだ。なあに、おべつかぢやあ無え、ほんの事だ。今日らだつて、お前さんに賴まれただから、もつと早く、兄いを連れて來うと思ただが、兄いの言ふにや……何時も行つて馳走に成つて、小遣へ貰つて歸るべえ、能でも無ねから、偶にやあ、旨へ物でも買つて行つて、お賤に食はして遣りてねつて……そこはそれ情合だから、俺が止めるのもきかずに、家へ歸ると、家にやあ、實家の兄貴でも持つて來ただか、珍しくま新しい、蚊帳が釣つてあるだ。

新吉。おい。作。詰らねね事を言ふなよ。手前は醉ふと、お饒舌に成つて不可ねえ。

作藏。お饒舌に成つたつて、好えぢやあ無えか。それからさ。其の蚊帳を、質屋へ持つて行かうつて、それをはづしにかゝるこね。女房さんは病氣が悪いし、赤ん坊は寢て居るし……。

新吉。止せ。止せ。左樣なくだらねゝ話は止さねゝか。

お賤。まあ、新さん。止めないで、話さしておしまひよ。

作藏。話したつて好かんべゝ。其樣に叱言いはねゝが好ゝだ。

それでね。女房さんが起きて來て、蚊帳へ取り着いて……俺あ好ゝが、子供が蚊に食はれて、可哀さうだから、それだけは勘辨してくれ、何うかようつて……糸のやうな手ゝして、蚊帳へ縋りついたゞよ。それを兄いが蹴飛ばして、無理に引張つたもんだから、お前、女房さんは前へのめつて、遂々生爪はがして終つただ。

新吉。おい、冗談ぢやねゝ。折角の醉が醒めちまはあな。もう止せつてゝのに……止さねゝか。

作藏。まあ、好いやな。

新吉。好かねゝや。止さなけりやあ搔痒るぞ。

（新吉は、作藏の傍へ來て止める。）

作藏。これ、搔痒つちやあ不可ねゝ……。それからお前、可哀さうに……。

新吉。これさ。もう止しねゝこ言ふに……饒舌るこ口を押さへるぞ。

作藏。止せよ。俺が口い押へてごうするのだおい、お賤さん。

そりやあまあ好いだが、それからね。赤ん坊が、細ゝ哀れな聲で泣き出すこ兄いが、煩せゝ餓鬼だこ言つて、沸ゝくり返つて居る藥鑵の湯を、赤ん坊の頭から……（身震ひして）あゝ、考へても慄然こするだ。

新吉。馬鹿野郎。冗談も大抵にしろ。

作藏。それからね。あゝ搔痒つてゝ……止せつたらよう。

新吉。仕樣の無ゝ野郎だ。くだらねゝ寢言見てゝな事を、べら〳〵饒舌りやあがつてさあ、もう寢ちまひな、寢ちまひな。

（新吉は無理に作藏を引立てゝ、奥の方へ連れ行かうこする。作藏は其の手を振拂つて）

作藏。今から何て寢られるもんけゝ。今夜は皆こ約束しただから、是から踊を踊りに行くだ。ぢやあ、もうお暇しますべゝ。

お賤。さうかゝ。ぢやおみつや、一寸其邊まで見てお遣りよ。年をこつて居るし、醉つてゐるから、轉ばれるこ困るよ。おみつ。はい、かしこまりました。さあ、作藏さん、お出でなさい。

作藏。やあ、何うも大きこ御馳走樣でムゝましただ、ぢやあ左樣なら。

（作藏はお光に助けられ、ひよろ〳〵しながら座敷を出て行く。）

新吉。酒を食らふと、彼の位煩せら奴はありやあしねに。
お賤。彼奴が煩さいおかげで、お前の親切が、よく私に解つたよ。
新吉。隨分俺も、悪黨に成つたらう。
お賤。其の後で、私に仕込まれたとお言ひなんだらう。
新吉。ちげへ無に。其の通りさ。はゝゝは。
（おみつがあたふたと、入つて來る。）
おみつ。御新造さん、嫌な奴がまゐりましたよ。
お賤。誰だに。
おみつ。あの、土手の甚藏さんでムいますよ。
新吉。又、博奕に取られたとでも言つて、來たんだらう。
お賤。留守だと言つて、歸しておしまひよ。
おみつ。然う申して居る中に、構はず上つてしまひました。
（話のうちに、甚藏は襖を明けて、入口へ座り込む。）
甚藏。へに、御免なせに、御新造さん、今晩は。……。
お賤。あら……。一寸新さん。甚藏さんが來なすつたよ。
（お賤は一寸テレて横を向く。新吉は急に居住ひを直して固く成る。甚藏は其の樣子をジロリと見て）
甚藏。おう、新吉。お前も此家へ來て居たのか。何でに、豆鐵砲を食らつた鳩見てに、眼ばかりパチクリやりやあがつて……。いや、お賤さん。今度は又飛んだ事で……さぞ御愁傷でムにまさう。御本家の方へは先達て、お悔みに參りましたが……ごうも何だか夢のやうでね。私も、隨分お世話に成つた旦那で……これ甚藏、手前は身狀が良く無にから、其れを改めなけりやあ、もう此の村へは置かねにぞつて……親切に意見をしてお呉んなせにました。八釜しい事あ八釜しかつたが、時々小遣ひなんかお呉んなすつてね。惜しまれる人は早く死ぬつていふが……五十五位ぢや定命たあ言はれませんや。
（おみつは茶を持つて來て、甚藏の前へ置き、直ぐ下つてしまふ。）
お賤。まあ、お茶を一つお上んなさい。
甚藏。へに。これは有難うムにます。
（取上げて一口飲む）こりやあ却々好いお茶だね。此樣な上茶を、村の奴等に飲ましたつて分らねに。お前さんも新吉も江戸つ子で、私も江戸の水を飲んだ者でさ。妙なもので他の奴等ぢや話が合はねにので、此の新吉と兄弟分に成つてから、お互に、錢が無にと言やあ、それ持つてけと言ふやうに、腹の中まで、サックリ割つた間柄だ。新吉の事を悪く言ふ奴があると、何でに、何がごうしたと言つて、喧嘩もするやうな譯なんだが……（新吉の方へ向直る）おい新吉手前、大分村中で評判が悪いぜ。亭主思ひの女房を打棄らかして、此處の家へしけ込んでばかり居やあがる。此頃ぢやあ、横曾根あたりの者は、途中で手前に逢つたつて、挨

拶もしねにさうだな。新吉こ言やあ、あゝ彼の江戸生れの薄情野郎かつて……何處でも此處でも鼻つまみだぞ。皆に憎まれて、歸りを待伏せてもして居て、向脛でも引拂はれやあしめへかこ……俺あ、心配て成らねにんだ。

新吉。おい〳〵兄貴。人聞きの惡い事を言つて呉れるなよ。死んだ旦那の遺言で、此處へ一寸〳〵見舞に來るのを、岡棒半分村の奴等が、何の彼のこ、妙な噂を立てるさうだが兄貴までがそれへ乘つて、此處へ來てそんな嫌味を、言はねにでも好いぢやあねにか。

甚藏。嫌味を言ひに來た譯ぢやあ無に。兎角色男にやあ、暗の晩が危ねにから、氣をつけて遣つたばかりよ。

お賤。さうして、お前さんは、一體何の用があつて、お出でなすつたんです。

甚藏。へに。御新造さん。今晩、折角お樂しみの中へ出ましたのは……誠に申兼ねた譯なんてムにますがね。旦那が壯健ておいでなさりやあ、默つて御無心申すんだが……御覽の通りの始末で、からもう仕樣が無に……。何卒お願へてムにますが、些こばかり小遣ひを、お貰へ申してにんだが……。何卒些こばかり(新吉)ねに新吉。無理か知らねにがお賤さんに願つてね。實は、借金を返して、江戸へでも行きてにこ思ふんだが……些こばかり小遣ひをねに。

お賤。困りますねに。旦那が御出でなさる時なら兎も角も、今では私も、心細い身の上なんですから、澤山の事は出來ませんが、ほんの私の心ばかりで宜しければ……。

甚藏。いにもう……恐入ります。

お賤。(若干か紙に包んで渡す。)まあ、餘り少しで、何の足しにも成りますまいが、其邊で一杯召しあがつてね。

甚藏。ごうも濟みません。有難うムにます、(紙包を開けて見る。)もし御新造さんに。こりやあ二朱金が二つ……たつた一分でムにますね。

お賤。それで少いこ仰有るなら、お氣の毒だが、お斷り申しますよ。深川に居た時分にやあ、隨分錢貰ひも來ましたが一分遣りやあ、皆黙つて歸りましたよ。お前さんが身寄親類こいふ譯でもなし……働きの無い女の身分で、それより餘計は出來ませんよ。

甚藏。そりやあ、若干かくらつてに譯ぢやあ無にが、借金の目鼻あ附けて、身の立つやうにして貰ふにやあ、何んな事をしても、先づ三十兩、お强請り申さなけりやあ、何うにも成らねに。

お賤。何だに。三十兩だに。ほゝゝゝ。さあ呆れ返つて物が言へないよ。女一人こ附込んで、餘り馬鹿におしでないな、何でお前さんに、三十兩のお金を出す、緣が無いぢやあないか。

甚藏。そりやあ緣は無にさ。緣が無にが、附けりあ附かねに

事も有りますめわ。此の新吉こ私こは、兄弟分でね。其の新吉が、こちら樣へ來て、御厄介に成つて居るから、弟の緣で來た私さ。

お賤。新さんは、兄弟分か知りませんが、私はお前さんを知りませんよ。私の家で、情交の仲宿でもしたこか、博奕の堂敷でもしたこ言ふなら、それは怖いから口止に、金を貸すこいふ事もあるだらうが、何もお前さんから、三十兩こいふ大金を、いたぶられる程の、弱い尻はありませんからね。はい、出來ませんよ。三十兩は偖おいて、只の三文も出せませんよ。

甚藏。まあ御新造さん。然う腹を立てねわで……。私のやうな大の野郎が、よくよく困り切ればこそ、盆の十五日こいふのに、此樣な形で、手を突いて賴みに來たんだ。此の身體を打破して、薪にしたつて、一分や二分の物はあらあね。

お賤。煩いね。いくら言つても、出來ないものは出來ないのだから、然う諦めて歸つてお呉んなさい。

甚藏。ぢやあ、どうしても、不可ねわかい。

お賤。さつさこ歸つてお呉んなさいよ。

甚藏。然うか、ぢやあ無理にもたあ賴まねわや。(又、新吉に。)やい、新吉、默つて引込んでる奴が有るものか。もつこ前へ出ろ。手前達がさういふ了見なら、言つて聞かせる事が有らあ。これ、女だこ思つて、優しく出りやあ好い氣になりやあがつて、太わ事をしこきやあがつて……。何だ、情交の仲宿や、博奕の堂敷がこれほどの罪に成るんだ。世の中に、惡い事こいふのはな。人殺しに、間男に、盜人だ。此家の旦那が如何して死んだか、他人は知るめわが、俺あちやんこ知つて居るんた。

(新吉こお賤は、悸こして顏を見合はせる。)

甚藏。彼の惣右衞門旦那が、病氣疲れてグッスリ寢込んで居る處を、襟の間へ細引を入れて、綾に取つて右左から、曳張つて殺したなあ誰だつけね。湯灌を賴まれた新吉に、手傳つたのは此の俺だが、新吉、手前あの時何て言つた。さまあ見やあがれ、好いか、よく聞けよ。咽喉首の筋の痕が一本十兩こ見積つても、二三十兩が物はあるんだ。

(甚藏が大きな聲に、二人こもはら〳〵する。)

新吉。おい、おい、兄貴。

甚藏。何てわ。箆棒めわ。俺が優しくして居るんだから、文句なしに出すのが當然だ。わゝおい、手前達を村へ置くこ此の村が穢れらあ。今に逆磔形にしやうこ、簀卷にして絹川へ投込まうこ

新吉。まあ兄貴。お前何で左樣な、くだらねわ事を言出すんだな。何こか口をきいて、お賤さんから、借りて遣らうこ思つて居る矢丸に、左樣な大きな聲をして……

甚藏。間抜けめ。ぢやあ早々こしやあがれ。默つて引込んで居やあがるから、餘計な文句も言ひたくなるんだ。

新吉。（お賤に）お賤さん。一寸顏を貸してお呉んなさい。

お賤。何だね、新さん。

（二人は上手の方へ行つて、囁合ふ。）

新吉。何しゝ困つたのは、湯鑵の時、佛樣の咽喉首に、筋があるのを見附け出して、何でも殺したこ白狀しろ、言やあ黙つて居てやるが、さも無けりやあ、是から佛を本堂へ持つて行つて、皆の見て居る前で、訊議をするこ言ふもんだから。

お賤。まあ、飛んだヘマを遣つちまつたね。

甚藏。おい、おい。何を其處で、愚圖愚圖言つて居るんだね金を出すのか出さねねのか……暑い時だ。手取早く極て呉んねね。

新吉。氣がいいな。まあ、つて呉んねね。今ねだつてゐる處だ。

（二人もひそ〳〵語合ふ。やがてお賤は座に戻り以前ははつかり變つた調子で）

お賤。まあ兄さん。只今は、濟まない事をいひましたねね。何も彼も、皆知つてお出でなさるんだつてねね。勘忍してお呉んなさい。本統に私は極りが悪いよ。でもねね、よくさう打明けて言つてお呉んなすつた。今まで此の人が、左樣な事を些こも、私の耳へ入れて置いちやあ呉れなかつたもんだから、逐ねね……。

甚藏。何をまご〳〵言つてるんだ。左樣な事あ如何でも好いや。一體金は何う成るんだよ。

お賤。さうお前さんが、根こそぎ知つて居るのなら、一つ味方に成つて下さいな。私だつて、出來るだけの事はして上げますよ。

甚藏。ぢやあ、金を出して呉れるんだな。

お賤。だからさ、今も此の人こ相談をしたんですが、實は此處で、三十四十のお金を上げた處が、埒石に水見たやうなもので詰らないから、一つ纏つたお金を上げますから、何こかして是からは、お前さんも堅氣に成り、私達も江戸へ行つて、世帶を持つ心算ですから、お互に此の事は、決して言はないこ、證據の書附でもねね……。

甚藏。こし分つた。兄弟分の友誼を思つて、然っ達引いて呉れるなら、俺も生涯堅氣に成つて、馬鹿を止める了見に成らうよ。

お賤。そこで今、直ぐお金を渡して上げたいんだが、實は旦那が未だ壯健な時……俺が死んだら直ぐ食ひ方に困るだらうから、死んだ後でも不自由の無いやうにつて彼の根本の聖天山の、手洗鉢の脇へ、二百兩だけ、埋めて置いて下すつたんだが。

新吉。兄貴。今もお賤さんのいふ通り、もう斯う成つたら三

人が、心を一つに持たねゐのは嘘だから、其の金を堀出した上、山分にして、江戸へ行かうといふ考へだ。

甚藏。左樣か。新吉……。旦那もお賤さんにやあ惚れて居たなあ。若旦那にも内證で、二百兩といふ金を埋めて置き、是で食つて行けなんざあ、金持は又違つたものだな。（ふと心付く。）然う事が極つたらば、早く堀出さねゐと、彼の山は、自然薯を堀りに行く奴があるから、無暗にやられると險呑だぜ。

お賤。女の手ぢや仕樣が無いから、どうせ賴まうと思つて居た處さ。恰度好いから、今夜二人で、堀出して來てお呉んなさいな。

甚藏。よし。ぢやあ俺が手を貸さう。新吉、何か堀るものは無ゐか。

新吉。植木屋が預けて行つた鋤と鍬が、たしか其邊に有る筈だ。

お賤。（小聲で）女中に知れると面倒だから、庭からソッと出かけてお呉れ。

甚藏。おつと承知だ。

（兩人は庭へ下りて、身仕度をする。お賤はあたりへ心を配る。）——此の道具廻る。——

第二場

古びた祠の前には森々として樹木が茂り、其の後が崖に成つて居る。絹川の流れの音が物凄く聞ゐ、木の間を洩れて來る白い月の光がさして來る。道具止ると。

（甚藏と新吉が、鋤と鍬をかつぎ、麻被り尻端折りて、山へ上つて來る。）

甚藏。好い塩梅に、月が出たやうだな。

新吉。探し物にやあ、お誂へだ。

甚藏。（手洗鉢の傍へ來て）手洗鉢の左だと言つたが、大概ここの見當だ。まあ、一鍬入れて見やう。

新吉。ぢやあ兄貴、賴むぜ。

（二人は肌ぬぎに成つて、段々深く掘る。）

甚藏。あゝ、びつしよの汗に成つちまつた。おい新吉。些とも、それらしい物は出て來ねゐぜ。

新吉。はてな。慥にお賤が左だと言つたんだが……事によると、向つて左だつたかも知れねゐな。

甚藏。こん畜生、何を好い加減な事を言やあがるんだ、無駄骨を折らせやがつて……、あゝ暑い。咽喉が乾いて堪らねゐや。水は無ゐか。

新吉。（手洗鉢の中を覗く。）手洗鉢たあ名ばかりで、柄杓は有つてもカラカラだ。何處かに水は無ゐかなあ。（ふと崖下を覗いて見て）おう兄貴、あれを見ねゐ。此の崖の中段に、清水が湧出す處があるんだ。煙管の羅宇から垂れるやうに、

チョロ〳〵水が落ちて、見ねね、月が寫つて居らあ。彼所の水は、そりやあ旨にぜ。

甚藏。いくら旨くつても、此處からちやあ、行かれめね。

新吉。どうかしたら下りられるだらう。

おう待ちねね。此の根方に、藤蔓が繩のやうに成つてゐるから、こいつにぶら下つて行きやあ大丈夫だ。

甚藏。成あるほど……旨にこを考へやがつたな。手前の智惠ぢやあ無ねやうだぜ。

（新吉は　キックリする。）

甚藏。よし。其の柄杓を取つて吳んな。

（甚藏は柄杓を口に咬へたまゝ藤蔓につかつて段々に下りて行く。新吉は、枝の伸びた松の木へつかまつたまゝ、上から見下す。）

新吉。おい、兄貴、大丈夫か。斯うして見ると、隨分深ね谷だなあ。どうだ兄貴、好い水だらう。中々旨さうだな。然うお前一人で飲んで居ねで、俺にも一杯持つて來て吳んなよ。よう後生だ。何なら、手拭に浸して來てくれても好いや。おう、柄杓へ汲んで來て吳れるのか。そいつは濟まねねな……こぼさねねやうに賴むぜ。

（新吉は此のうちにそろ〳〵と、懷中に呑んで居た短刀を扱き、狙ひすまして、力一杯に藤蔓を切るワッといふ甚藏の聲をしるべに、傍にあるごろた石を五つ六つ、續けざまに轉がし落とす。折から月はむら雲にかくれて、四邊は眞の暗さ成る。新吉は短刀を納め、鋤と鍬をひつかんで一散に山を下りる。）

——道具廻る——

第三場

舞臺は元の妾宅に戻る。

（お賤は寢卷の浴衣に着替へ、一人手酌で飲んで居る。雨がバラ〳〵降つて來る。

お賤。まあ、生憎ばら〳〵やつて來たやうだが、新さんはどうしたらうね。旨く遣つて吳れゝば好いか……。

（折から新吉は、鋤と鍬を抱へたまゝ、息急き、庭口から飛込んで來る。）

新吉。おう、今歸つたよ。

お賤。あゝ新さん。さあ早くお上り……。

（雜巾を出して足を拭てやる。）案じて居たが、旨く行つたかね。

新吉。疾う〳〵遣つてしまつたよ。何しろ雨でびしよ濡れだ

何さつぱりと着替へてねな。

お賤。寢卷浴衣を出して置いたよ。今、熱いお湯で背中を拭くから、一服おやりよ。

（お賤は甲斐々々しく、金盥へ鐵瓶の湯をあけ、手拭を絞つて、新吉の背中を拭く。）

お賤。さあ、これをお着よ。（新吉の後から、新しい浴衣を着せかける。）
新吉。あゝ有難ね。やつと生變つたやうだ。
お賤。御苦勞だつたね。まあ、落ちついて一口おやりよ（杯をさす。）是で二人とも、怖いものは無くなつたね。
新吉。うむ。一寸した間に旨へ事を考へたな。流石の彼奴も氣が付かなかつたが、俺が藤蔓を傳はつて下りろと言つた時に、手前の智恵ぢや無ねやうだと言はれたにやあ、此の胸がドキリとしたよ。
お賤。それで後から石でも投げつけて遣つたかね。
新吉。眞逆樣に落ちた處へ、上から此の位の奴を二つ三つ、打突けて置いたから、何うしたつて助からねねよ。
お賤。そりやお前、大出來だつたね。
（雨の音に氣が附いて）おやゝ、酷く降つて來たぢやあないか。折角の踊も是ぢやあ、代無しだねね。
新吉。おう、馬鹿に降込むぜ。おみつを呼んで戶を閉めさせねね。
お賤。おみつは踊が氣に成つて、早くから出たがつて居たから作さんの處へ遊びに遣つたよ。
新吉。左樣か。そいつは却つて好い都合だつた。
お賤。降る故か、何だか今夜は、嫌に陰氣に成つて來たぢやあないか。もう戶締りをしてしまはうよ。（立ちかけて庭の方を見る。）おや、誰だね。
新吉。何だ。
お賤。庭の方から、誰だか入つて來たやうだよ。
新吉。氣の故たらう。今時分、誰も入つて來る譯は無ねね。
お賤。でもあら……、其處へ入つて來た。誰だね、お前は……無暗に入つて來ちやあ不可ないよ。
おるい。はい……私は、新吉の家内でムいます。
（此時、赤子を抱いたおるいが、庭先に立つて居る。）
お賤。（悸して）ねッ。一寸、新さん。お内儀さんだこさ。
新吉。止しねね。馬鹿だな。病人で寢てゐる者が、今頃出て來る譯が無ねや。
お賤。でも……彼所に。……。お前、一寸逢つてお呉れよ。
新吉。來る氣遣ねは無ねこいふのに……
お賤。だつて、あんなにびしよ濡れに成つて……氣味が惡いぢやないか
（お賤は怖がる。おるいは、病疲れて利かぬ身體に、赤子を漸う抱いて、椽端へ來る。）
おるい。御免下さいまし。
新吉。（一と目見て驚く。）お、、おるいか。何だつて手前、今時分、此の降る中を出て來たんだ。
おるい。（それには答へず、お賤に向つて）あの、あなたがお賤さんでムいますか。かけ違つて、お目にはかゝりませんで

したが。毎度新吉が上りまして、御厄介に成りますので、ごうか一度、お禮が申上げたいこ、存じては居りましても此の通り子供はあり、私もぶら〳〵煩つて……。

新吉。何を愚圖々々言つてるんだ。うす見つともねい、早く歸れ。（立ちかゝる。）

お賤。まあお止しよ、新さん。（新吉を制しながらおるいに向つて。）あなた、何も此の降りますのに、夜中になんかお出でなすつて、左樣な事を仰有つては困りますね。新吉さんこはお互に、江戸からのお馴染で、知らない土地で逢つたものですから、旦那も貧になすつた上で、斯うして時々遊びに來てお呉んなさるので、他に譯も何も有りやあしません。ねい、新さん。折角斯うしてお内儀さんが、迎ひにお出でなすつたんだから、今夜はもうお歸んなさいよ。

新吉。何も歸る事あ無いや。やい、おるい。手前はそんな風をして、亭主に恥をかゝせに來たのか、詰らねい事に悋氣をして、手前、餘程逆上せて居るな。

おるい。はい。逆上せて居るかも知れません。私は如何なつても好うムいますが、此子はあなたの一人の伜……親だからこ言つて、我子を殺しても好いこいふ譯は有りますまい表向には出來ない事でムいますから、今夜、夜の明けない中に内々で、法藏寺樣へでも願つて、坊やの葬ひを致したいこ思ひますが、誰も家へは參りてはなし、私も長の煩ひで、ごう致す事も出來ません。ごうぞ一寸お歸りなすつて、此子の始末だけなすつて下さいまし。

（新吉は默つて居る。おるいはお賤に向ひ）

おるい。もし、あなた……。私が申したのでは、宿は歸つてくれませんからごうかあなたから、今夜だけは家へ歸り、子供の始末をつけてやれこ、仰有つて下さいまし。

お賤。新さん、お歸りよ。あんなに言つて居なさるぢやないか。

新吉。歸れたつで、今つから仕樣が無いやな。

お賤。夜半だつて、用がありやこそ迎ひに來たんだよ。旨く言つて居たつて、本木に優るうら木なしこ言ふからねい。お内儀さんに迎ひに來られりや、滿更でもあるまいよ。

新吉。冗談を言ふない。嫌だ。誰が歸るものか。

おるい。でも、あなた……坊の始末を……

新吉。ゝ、煩いや。始末も何もあるものか。手前こそ、さつさこ歸れ。

お賤。そんな事を言はずにお歸りよ。さあ、仲好く手をひかれてさあ。

新吉。何を言ふのだな。やい、まだ歸らねいのか。

（新吉は癇癪紛れに、突然おるいの腕ぐらを取つてドンこ突く。おるいは赤子を抱いたまゝ轉ぶ。）

おるい。ゝ、情けない新吉さん。今夜歸つて下さらぬこ、此

の子の始末がつきません。
新吉。ねゝ、まだそんな事を言つてるのか。歸れこいつたら歸らねねか。
（新吉は、泥だらけの姿で又這入るおるいを蹴返し、胸ぐらを取つて生垣の外に引摺出し、戸口を閉めるおるいは泣きながら、とぼ〳〵と入る。雨は漸う降止んで、雲の切間に月がさす。）
新吉。あゝ心持が悪い。お賤……冷たくつても好いから、こいつへ一杯注いで呉んねね。（湯呑を差出す。）
お賤。だつてゝ私や困るよ。お内儀さんを、彼樣に酷い目に逢はせてさ。
新吉。構ふものか。さあ、もう一杯だ。
（新吉は、又湯呑へ酒を注がせる。）
お賤。だつて新さん。あのお内儀さんの怖い顏つたらなかつたねね。子供を抱いて恨めしさうに、斯うジツと睨まれた時は、私や慄然として、冷汗が出たよ。
新吉。止せ。何を彼奴が睨むものか。そりやあ皆氣の故だよ
（折から村の者が二三人、提灯を持つて通りがゝり、生垣の外から聲をかける。）
甲。新吉ごんは居なさるかね。おゝ、此處に居た。此處に居た。さあ、早く歸つておくんなせね。
新吉おう、太左衞門さんか。（緣先へ出る。）
お賤。おや、皆さんがお揃ひで……何か家に用事でも……。
甲。何かごころか……。もう、氣の毒ども何でも彼でも、始末か附かねねだ。
乙。先刻から探したの探さねねのつてさあ、直ぐ一緒に歸りなせね。
新吉。一體、何が初まつたんで……。
甲。何が初まる處か……お前の處のお内儀さんが、片手に冷たくなつた坊やを抱いたまんま、草刈鎌で咽喉笛をかつ切つて、死んでるだ。
新吉。お賤。にッ。（仰天する。）
乙。困るからよ。夜が明けたら、屆ける處へ屆けるこして、今夜のうちに、名主樣へ話しをして置かにやあ成るめね。
丙。私らは先へ行つてるだから、お前さんも後から早く來て呉んなせね。
（いひ捨てゝ村人は入る。後に二人は顏見合はせて）
お賤。新さん……。
新吉。お賤。……そんなら今、此處へ來たのは……。
（途端に奥で、大きな音がする。）
お賤。あれ、怖いよ。
（お賤は新吉の膝に縋り附く。此時後の障子を蹴破つて、士手下の甚藏が、髮は亂れ、顏から身體へ血を浴びた姿で、

刀庖丁を振かざして、ぬツと出て來る。）

甚藏。やい、新吉、お賤。よくも俺を一杯、はめやあがつたな。

（二人はそれを見て、再び驚く。）

甚藏。もう勘辨が成らねゐから、二人の命は貰つたぞ。

（新吉も決心して、以前の短刀を拔いて立向ふ。お賤はあちこちへ遁げながら、皿小鉢を取つて投げる。調度の物が引くり返る。面白き立廻りのうちに――道具ゆる――）

絹川の堤。川の流れも美しく、雨後の滿月が靑く明るい。草土手には燈籠が澤山見ゐる。其の向から、村の男女が大勢で盆踊りを踊りながら近づいて來る。

（こゝへ、甚藏と新吉が打合ひながら出て來るので、踊の男女はばら〳〵と遁げ散る二人は、上に成り、下になり、組合つて居たが、結局、甚藏は新吉を組伏せる。）

甚藏。さあ、野郎。よくも俺を、谷底へ突落しやがつたな。

新吉。勘辨してくれ。全く俺が惡かつた。おい兄貫。俺の金をみんな遣るから、了見して呉れ。あゝ、痛ゐ……痛ゐ……。

甚藏。痛ゐのは當前だ。生け太ゐ野郎め。

（甚藏は拳を固めて、新吉をポカ〳〵撲る。）

新吉。兄貫……後生だ　助けてくれ。

甚藏。うぬのやうな野郎を。助けて置けるものか。さあ、覺悟しろ。

（甚藏は出刀を取つて、新吉の胸へ刺通さうとする時、ズトンと一發……甚藏は背をうちぬかれてドウと倒れる。此時物かげから、お賤が短銃を持つて姿を現はす。）

お賤。新さん。ごこも怪我ば無かつたかゐ。

新吉。おゝお賤……お前も大丈夫か。

お賤。あい。私も一時は途方にくれたけれど、女が刄物三味したつて迚も叶やしないから、旦那が小鳥を打つ爲に、しまつて有つた鐵砲を思出して、持つて來たのさ。

新吉。そんなら、今の鐵砲は……。

お賤。怖々ながら、私が打つたのさ。

新吉。其の鐵砲が無かつたら、俺は危ねゐ處だつた。

お賤。さあ、斯うなつたらもう仕方が無い。少しも早く遁げやうよ。

新吉。よし。ぢあ支度をしねゐ。

（二人は忙しく身づくろひする。此時、捕手が四五人出て來て、二人を取りまく。）

捕手。御用だ。（いひつゝ二人へかゝる。）

（此のうちに又賑やかな囃子の聲と共に、踊の輪が廻つてくる。お賤と新吉は拔けつくゞりつ、立廻りながら、踊の群に紛れて、一散に向へ入る。）

――幕――

藝術家としての圓朝

高安月郊

私は圓朝を隨分熱心に聽いた。近くへ出た時は殆ど毎夜聽きに行き、遠い時は晝行つた。

其頃燕枝、如燕、南玉、一、伯圓などが落語、講談にも上手な人々が多かつたが、圓朝は群を拔いてゐた。彼は將に藝術家と云へる。尤も創作力はそれ程無かつたが、傳說や、支那西洋の種まで潤色した手際は其頃の狂言作者に當つた。そして對話の眞實、人物の活躍は彼等より優つてゐた。劇の世話物でも兎角一定の芝居言葉があるが、圓朝のは實の儘で、唯侍丈は芝居の樣に何て「ござる」であつたのは、ごういふ譯であつたか。趣向にも兎角芝居染みた所が多かつた。鹽原太助の馬との別れ、實父との再會、牡丹燈籠の飯島がわざと打たれる所、榛名の梅が香の草三が主人の身代りになる所など餘り芝居式であるが、それも其頃の習で、そこを興味の中心にしたのである。從つてまた芝居にもし易い、然し始めて舞臺へかけた時は五代目菊五郎ですら先つ辭したといふ。それは一人で皆の言葉を使つて活現させる手際にかなはぬと云つたとか。誠に男女老若それ〴〵個性を現はしたが、私の聽いた頃は晩年であつたから、艶は若い時ほどで無かつたにちがひない、それでも情味はまだ〳〵あつた。そして哀は十分であつた。涙を含んだ調子は何よりの長所で、それで役者の樣にチョボや何かを借らずに、素で泣かせた。私に最も深い印象を留めたのは此悲哀である。默阿彌にも無い、菊五郎よりも深い悲哀である。馬の別れでも不自然と思はれなかつた牛三郎が妻を斬らうとして斬りゐぬのを鼻が斬つてくれといふ所、草三が引受ける所など息もつけなかつた。

元來江戸の藝術家に稀薄なのは此悲哀で、武士本位の處丈

兎角意思に強く、悲哀を制して、淡白過ぎるのが習てあつたのに、彼がそれに長じたのは、ごこの系統かと思ふと、矢張江戸の生れ、橘屋圓太郎といふ落語家の子で、親に孝順、其師圓生の長わづらひにも忠實に世話をして、其死後家族まで扶助したといふ。それでは本性から情に厚かつたのである國芳に就て繪を學んだのは、浮世繪趣味を加へた。鐵舟に桃太郎の話をして見よと云はれて頓悟したといふが、ごれ丈禪味を解したか、さにかく精神の修養をして、自在で又眞實の底に觸れたのである。

彼は正に江戸の末に育つて、明治の初期に成熟した藝術家の一人であつた。雅邦、芳崖、是眞、圓十郎、菊五郎、默阿彌、林中、お葉、これ等の中に交つし耻つかしくない一人であつた。江戸の末は總て頽廢したが、藝術は最後の印象を留めるへく凝結して、割に名人が多く出た、そして傳統を大成して、なまじ維新の空氣に觸れなかつた丈整つてゐた。新材料や、新形式を取つた清親、魯文、伯圓なごより彼等の方が藝術ごして完璧であつた、圓朝も明治の話こして孝子傳なごやつたが、そんな物より江戸時代の物の方が好かつた。西洋種の飜案より幕末の實話を種にした方が活々してゐた。默阿彌でも、菊五郎でも同樣で、ごうしても、自分こ共通するものでないこ氣が無かつたのは當然、そして默阿彌、伯圓なごが兎角盜賊を取つて「白波作者」「泥棒伯圓」なごゝ云はれ、如燕が猫化を得意にして「猫」こ云はれたに對し、彼が忠實の人、義俠の人を主こしたのは頽廢した時代道德より、彼自身の道念からであらう。幽靈をあつかつたのは其頃の趣味に投じたのであるが、他ほご慘酷で無い。艶があり、足もある幽靈は情味に深い。彼は唯おごしの爲に幽靈を出さなかつた、人情の死後まで印象する力を示す爲であつた。

彼の藝術は情の藝術であつた。そこに多くの力があつた。然しそれは彼の言葉の云ひまはしこ表情にあつたので、速記しても、模擬しても其眞相は出ぬ。舞臺へかけて、役者が彼ほごの臺詞まはしこ、彼よりの自在のこなしをしたら、彼以上の味が出る筈であるが、總ての人物皆彼の樣にこはゆくまいから、全体の味は彼に限るか。何にしても彼の惟力は其道での模擬者より、舞臺に多く殘るかも知れぬ。

彼は高坐へ出る前に薄茶一服を飲んだこいふ、それから出るこ腰を曲けて靜に席につき、着物の端を十分引いて坐り、叮嚀に辭義して、湯を呑み、先つ低い調子で始める其落付、高坐の上の經驗ばかりで無い、人生の經驗こ、それにつけての修練からこ見ねた。唯藝ばかりの修業では到底妙境に入られるもので無い、人間こしての修練がまた藝術こしての修業に肝要なのである。彼はそれを解してゐたのか。私が今も思ひ出すのは三遊亭圓朝より、悲哀な、情の人こしての彼である。

圓馬を通して見た圓朝

食滿南北

鳥江君が、圓朝の事を描けといふ。

私は若いから圓朝を識らない。

しかし私は圓馬を識つてゐる。

圓馬は圓朝の高弟である。しかし今の圓馬ではない。

私は圓馬から塩原も、牡丹燈籠も、榛名の梅が香も、江島屋も聽いた。

圓朝は極嫌味な男で若い時分にひぢりめんの襦袢なんか着てゐた事を訊いてゐる。

圓馬にはさうした師匠ゆづりの嫌味はなかつた。

圓馬は漢法醫者と仇名があつた位、生眞面目な男であつた。

この人の口から聽いたすべての話は圓朝ソックリだといふ事であつた。

それによつて圓朝を察しると、今の四何、圓何等等等の如く妙に芝居の身振をしなかつた。又妙な似聲にならなかつたのが豪いと思ふ。

牡丹燈籠の伴藏の怪談談などは五代目菊五郎がソックリ圓朝を眞似たといふ噺だ、どうもさうらしい。あの五代目のやり方は寧ろ寫實だつた、決して芝居らしくなかつた。

圓朝は豪かつたに違ひない。

圓馬でさへ滿足が出來たのだから、その師匠で、しかも自分でこしらへた談をやるのだからきつと圓馬以上であつたであらう。

累ヶ淵は聽いた事がないからちよつと當りがつかないが、圓馬の高坐の口調から押すと、かうした世話物が無論得意であつたであらう、怪談になると、全く圓馬といふ男の顏すべてが怖ろしくなる。きつと圓朝もそこいらの呼吸が旨かつたのであらう。

本當をいふと大勢の役者がやるよりは一人が喋舌つてゐる方が凄味がある。

それは半分は察して自分で凄味をつけて行くからである。

しかし圓朝も無く、圓馬も無くなつた、現代では、延若さんや、猿之助さんの世話物上手にかうしたものを見せて貰ふ事は、圓馬を通して圓朝を觀るよりもつと〳〵面白いに違ひない、まして脚色は木村錦花氏こいふ斯道の達人である鬼に金棒だ、わたしらは見ないうちからこの芝居は面白いと極めか、つてゐる。

『累ヶ淵』脚色談

木村錦花

こんど、大阪中座の九月に上演される初代三遊亭圓朝の「眞景累ヶ淵」は五代目菊五郎の圓朝物より脚色方針を變にてやりました、こいふのは圓朝の味が判らない所から、菊五郎の演出でもいけないこ思つて、全然現代劇を脚色するつもりでやりました、つまり圓朝の芝居話よりも素話の味を取入れることに努めました。

實を申しますこの圓朝物の脚本化は非常に難かしいことで、あの大作家河竹默阿彌翁ですら圓朝物はあの多作家に似

合はず、たつた一ッしかして居りません。

元來默阿彌翁はこの圓朝と馬琴の崇拜家で、この二人の作家の物は最初から餘りに芝居になり過ぎてゐるといふ所から筆を取らなかつたさうであります。で、圓朝物は彼の「西洋噺日本寫繪」を團十郎左團次に新富座に書卸し、馬琴物は彼の「石魂錄」を脚色した以外やつて居りません、しかし門人の河竹新七は圓朝物を歌舞伎に大分移してゐる、この累ケ淵は嘗て或小芝居で脚色された事もある、最近では市村座で梅幸と菊五郎に依て「豐志賀の死」の件りをやつてゐます。

こんど私が脚色した所は、甚藏殺しの件り、三十餘席に亘つてゐる長いものを三幕にしたので、累ケ淵全體から云へば丁度まん中の所であります、圓朝の原作は下總を舞臺にしてゐて、盛んに出る人物に下總の方言を使はせてゐますが、私は八月東京歌舞伎座初演前に下總へ實地研究に參りました蓋し下總言葉なるものを一々役者に云はせることは鳥渡考へものだと思ひました、それは頗る早口でその上に鼻にかゝつて聞ゐるといふのだから芝居では感心しないのです、この芝居を私が脚色しやうと思つたのは、盆芝居の怪談といふ註文と圓朝全集刊行を紀念する爲で、その仕事の上で圓朝會の鈴木行藏氏や川尻清譚氏に非常なお力添ゐを賜はつた事をこゝに感謝しておきます。

扇子一本

姥谷生

「眞景累ケ淵」は圓朝の處女作で二十一歳の時の作だと言はれてゐる。圓朝はその頃しきりに新作を思ひ立つて、この「眞景累ケ淵」は露店で探し出した草双紙を種にして作つたものであると言はれてゐるが、その種本が何であつたかは知つてゐるものがない。

圓朝が初めて素噺を演つたのは兩國の山二亭といふ寄席でこの時の出し物が「眞景累ケ淵」であつたのである。

◇

その頃圓朝は白粉を塗り赤い襦袢を着て、道具仕掛けの芝居噺を得意としたさうである。圓朝の芝居噺に出る聲色は五代目彦三郎、九代目團十郎、五代目菊五郎、中村芝翫、八代目半四郎、四代目高麗なぞあつたと言はれてゐる。

◇

圓朝物で芝居になつた「摺原多助一代記」「怪異談牡丹燈籠」「安政三組盃」「粟田口鑑定折紙」「名人長次」「鏡池操月影」等は悉く三世新七の作になつてゐる。

居見たまゝ

渡海屋

河野巨縫

本舞臺常足の二重眞中のれん口、上手の方壁に色々帳面がかゝつてある、其の上に神棚、下手は戸棚、この前に菰包の荷物あり、九尺の障子屋體いつもの所に門口、すべて船問屋渡海屋内の體、波の音にて幕開く。こゝにおつる船頭女房の拵へにて組庖丁、料理のありさま。船頭二三人は荷物を扱ふてゐる。

おつる「マア皆さん一ぺく呑しやんせいなア」「イヤ迎てもの事に此荷物を仕舞ふてから」

こいろ〳〵からかひ

おつる「又そのやうなてんごう計り早うお煮化上らんせ」

皆々茶のみ荷をかついで船に送り又は奥の荷調べに這入る、おつるは獨になり「船頭衆の大きな聲でもお安さんはようマア寢入つてドレ〳〵布團をかけて進ぜませうか」と

二枚折のかたへにお安が寢てゐるをいたわり奥へは入る

是より床の淨瑠璃に成り

〜かゝる所へ誰れこても知らぬ鎌倉武士家來引具し入り來り」て向ふより相摸五郎侍連れ立ち花道よき處にて侍「あれが銀平の宅に厶ります」

五郎「案内いたせ」

侍「畏まました」と訪へば女房お時奥より出て「是は〳〵ごなた樣かは存じませぬが只今あるじ銀平は問屋廻り私は此家の女房御用の筋はこしこやかに應へれば侍の取次を待つて相摸の五郎

「おゝさうか。其方女房であらば云ひ聞かさん」と北條の家來にて此度義經經九州に落ちる話に依り主人時政の名代として討手に來はしたが打續く風雨に船はなし困つてゐた矢先に此家より日和次第に船が出ると聞いた其船貸せよ」と理不盡に申入れるを女房お時「それはまあお大切な御用に船が無うて嘸御難儀さりながら内のお客へは先約のある事」と當らずさはらずに斷りをすれどいつかな聞き入れず

「その武士と同船さへもこばむはサテハ平家の餘類か、判官義經にゆかりのものか」

サア〳〵〳〵こせり詰められハッと計り途方に暮る、折ぢ誂らへの嗚物に成り此家のあるじ眞綱の銀平雨傘を片手門口に不審顔して佇み内の樣子を立聞

いてゐるこもしらず五郎は猶も嵩にかゝつて
「ゐゝ面倒なそれ踏込め」
と止むる女房を突のけ蹴倒すを今戻つた體にて銀平ズッと割つて入りおすけを圍い兩人の手をぐつゝ捻上げる
お時「おゝよい所へこちの人」
五郎「こりや身共をば何とする」
銀平「イヤ何とも致しませぬつひに見馴れぬお武家様女子をこらへて御人體にも似合ませぬマアお靜まりなされませ」
で銀平下に居て
言葉低うに其理不盡をせめ
「一夜のお宿でも唐賣、それを踏込まれましてはお客人へ私が立ませぬ御了簡を」
と云へご聞き入れず拔打に斬付るをひつぱずして利腕こり
「町人の家は武士の城廓敷居うちに泥足のみか其刀で誰れを斬る又判官殿にせよ此銀平がおかくまひ申したら何とする」
と門口へもんごりうにせ刀をへし折り追ひ拂ふ。門に待つた藏
「お旦那何となされました」で可矢味になり釣餌になつた刀を右にて延ばす事よろしく魚つくしになり『嵐に逢ふたる小舟の如く尻に帆かけてにて波の音をかぶせ向ふへは入る
銀平「口程にもない侍めだ、とは云ふもの、あのやうな奴か來るやうでは最早出舟に間もなければ御無事を祝うて御出立ドレ出船の用意にか、ろうか」
と一間のうちには入る
「義經公旅のかん苦にやつれ果たる御かんばせ、にて障子家臣より義經公四天王を從へ出になり
義經隱すより顯はるゝはなし」と不遇の身の置き處さへなきをなげき町人の身にて此難儀を救ひくれたる禮を述べ
「世が世の義經なら武士に引めけ吾しつかはんもの」と四天王もつ共無念の拳を握る女房お時おりを見て
「さきの鎌倉武士取つて歸さよお身の妨け」こいよ〳〵出立の心持にさせるが義經主從日和を案ずるに
「眼のあたりは荒大なれご夫銀平は日和見の上手」と夫自慢をかこつけて安心させ
下女「サアお粗末にはござりますれご船路の旅を恙なうお目出鯛のむしの肴でわざこお祝ひなさりませ」
『門出を祝ふもてなしに大將の御けしきうるはしく
有合ふ簑笠を着せて主從打つれ波の音と共に向ふへ這入るあとにお時、鐘の音に思ひ入れあつて「イヤこうするうちもう日暮れごれお燈明を」

と神棚の灯をてらし
「娘は何していやるおやす〳〵
あいと答へて娘お安も出て來る
お時「今夜はこゝさまはお侍衆を元船迄お送りゆへそなたも寢る迄是に居や、……はて銀平殿〳〵」
と呼ぶ聲もろ共に
『そも〳〵是は桓武天皇九代の後胤平の知盛
にて上手障子を引開けこの内に銀平實は新中納言平知盛好みの拵へ白糸縅の物具に白柄の長刀を構へゐる娘お安實は清若君、女房お時實はお乳人典侍の局、にて局共々君を上座に直し
知盛「時世なれば淺ましくも御尊體は知盛と共に西海に沈むと世を欺き今迄沿んだがいよ〳〵今日こそ一門の鬱憤を晴らす時節到來
と勇みに勇み御盃も早々に
「知盛早う」の御聲あとに太皷浪になり『砂をけたてゝて花道に出るつなぎ幕

二、大物浦の場

舞臺上手に寄せて中足家體一面に伊與すだれをおろし、下手向ふ二段の波小高き芦原よろしく總て裏手の體波の音にて道具止る陣太皷の音の中に若君局達知盛討手の吉左右を待ち詫びて居る處へ相摸五郎注進に出る味方の苦戰の物語りよろしくあつて『申すもあへず走りゆく、てごんちやんにて五郎向ふへこつて返す典侍の局無念の思入れにて
典侍の局「スリヤ一大事に及びしぞ、沖の樣子は如何に」
と襟引き開ければ一面に兵船の模樣が見へ松明天をこがさん計りの中を入り亂れて戰ふさま手にとるやうである
とみこうみ立ちつくすうちに提灯松明次第〳〵に消へ失せて沖もひつそり、一同あまりあきれて泣きも出來ず途方にくれてゐる處へ又もやごんちやんにて入江丹造手負ひにて刀つき〳〵走り出で一寸放心の體ながら君の御前に心ひきしめ物語る苦境丹造『知盛敗戰、御局も御覺悟あれ、われは冥途の魁申す」と
云ひもあへずもろ肌ひろげて自刄し波へ飛入る
一同若君を擁し身も浮く計りに嘆き
「此尋常なお姿を海に沈むる事を思へば」と
身内ふるはし
「君はさかしくましませども死するとは露知り給はす其御樣のいぢらしさに」

心そゞろなれご詮方なく〳〵に床の合方になり若君を抱きあげ下手の岩臺へ乘り海を見てキツトなり

典侍「いかに八大龍王恒河の鱗清若君のおん入りなるぞ守護したまへ」

ご波に入らんごする時早く義經主從君を小脇にかひ取る局は驚き君ごられてはご長刀押取り打かくる四天王これを支へながら上の家體に入る波の音かけりになり向ふより手負の知盛、後より辨慶

知盛「若君はいづくにましますか

お乳人典侍の局」

ご呼はつてごつご伏しまろぶ

君を案じよろばひながら尋ねてかへるご眼前に義經、君をいだけるに、

『アラうらめしやいかに義經』ご論になり

『思ひぞ出る浦浪に、

よりサア勝負々々ご詰めよるも義經少しも騒がず

「ヤア知盛さなせかずごも義經云ふごごあり」

で君を局に渡し

義經「其方西海に入水ご僞の此處に忍んで一門の仇を報ひんごは天晴な所業ご」賞め「君は必ず御恙なき樣計ふ」ご聞くに知盛氣も逆ち

知盛「チエッ殘念や口惜しや……で痛手ながら立ち向ふを辨慶押へながら「發心せよ」ご持つたる珠數を知盛が首にかける

無念の顏色物凄きうち若君涙をうかばせ

清若君「長々の介添へはそちが情け又麿を助けしは義經主從が情けなれば仇に思ふな知盛」

ご云はるゝうちに局は其懷劍咽につきこて名殘おしげにお顏をうちまもり

『さらばご計り此世の暇』

にて落ち入る知盛がつかの勇氣くぢけて

知盛「昨日の仇は今日の味方アラ嬉し」

ご君のゆく末見ごゞけ安堵のおもひもろごもに

清若君「さらば」

知盛「おさらば」

ご碇綱を身にまきつけ

此うちに義經主從君を守護して花道へ出で

『忠臣義臣其なきがらは大物の千尋の底にくち果てゝ、名は引汐に流れ〳〵て

『後しら波ごぞ成りにけり

知盛碇をさし上げ岩の上より後の波間へ落ち入る

波の音かけりにて幕

幕外大入りの鳴物にて義經を先に皆々向ふに入る

木の頭。しやぎり。

初めての新舊合同

實川延若

長らく東京に參つてゐました私も、この中座九月興行にまた歸つて參りますが、こんどは珍しく猿之助や大阪からは雀右衛門、吉三郎、松之助、扇雀、霞仙等を加へて、それに新派の河合武雄と合同といふ顏觸れで、これが當地で新舊合同をやるのはこれが最初です、新派の一方の旗頭として嬌艶な舞臺姿を見せてくれる河合君との合同が、かうした一時的のものでなく、私は永久的のものであればさぞ面白い研究が相當に出來ると思ひます、河合君の知らない歌舞伎の型を或場合には傳授もし、また河合君とも大いに新しい芝居を研究したいと思ひます、そして延若河合の一座として毎興行に大名題連を同劇に合同させる樣にすれば、きつと變つた芝居が出來る事でせう、私は今度の河合君との合同を一時的のものでなく、永久的のものにしたい、少くともさうした可能性をこの劇界に求めたいといふのが私の新舊合同に對する理想であります。そんな合同が實現される樣に一日も早く好劇家諸氏のお力で劇界の機運をお進め下さる樣お願ひします、餘談はさておいて今度私共が中座に上演いたします一番目の「渡海屋」は大阪では初演の知盛、二番目の圓朝作「眞景累ヶ淵」では甚藏をやります「知盛」は大正八年神戸日本劇場（今の八千代座）でやつたのが初役です、それ以來種々と新工夫も積んでやつて來ましたが、今度も一層の新工夫を積んで演じます、さて二番目の芝居ですが、圓朝原作の「累ヶ淵」でも甚藏殺しの件りと云つてある長い講釋の面白く聞かせる責任のある後目を荷つてゐます、やゝともすればジメ〳〵となり勝の、陰慘な事件の中に、この甚藏といふ人物の當然荷はされる後目はどうしても或一種の三枚目でなければなりません、と云つて晋通の三枚目でもないのです、劇全體に流れる凄慘な氣分をぐつと浮き立たせるといふ人物であり乍ら最後迄劇の効を引しめて行く上に多大の効果をもたらす人物であるだけに、無暗に輕い演出をし見物を唯笑はせればよいといふのでもなく、と云つて七ムツかしく納まつてやつても駄目な役です、これには私としては近來にない自信を持つて或程度迄表現してゐるつもりです、「中央」編輯子に問はるゝまゝ、私の感想は右の如くであります。（東京歌舞伎座の樂屋にて）

自由俳優としての合同

河合武雄

大阪で私が歌舞伎の方と合同するのは此度の中座九月興行が最初です、東京では既に菊五郎さんとの合同で「海の勇者」や「冬木心中」をやり、また猿之助さんとも「今戸心中」をやつて來ました、延若さんとは此度が初めてであります、かうした風に度々歌舞伎の方と合同して感じさせられることは、私が「新派」の俳優だと呼ばれることです

「新派」といふ言葉位私の嫌ひなものはありません、あの「新派」といふ言葉からは何だか古いひゞきが傳はつて來ます、一層の事「新派」といふ呼稱をブチこわして終ひたいと思ひます、けれども、決して「新派」の持つ生命は滅びないと信じます、たゞ「新派」といふ呼稱だけをブチこわさうといふのであつて、私たちの進むべき道はまだ前途に多くの望みが持てると信じます、それで歌舞伎の方と合同する際も、決して新派の俳優だといふ自負心（？）よりも、自由俳優として新派とか歌舞伎とかの境界を取りのぞいて附合ひたいと思ひます、さうした意味でこれ迄も度々の合同をし、またこれからも合同して行きたいと思ひます、こんゞ私は「海の勇者」老いたる母およしで猿之助さんの末二郎で現代劇を、また「眞景累ケ淵」の延若さんの甚藏や猿之助さんの新吉に附合つてお久とお賤といふ役を演じます、私に取つては他流試合の事ですから役の輕重は云はずに、いつの場合も充分熱心に舞臺を勤めるつもりであります。（赤阪永田町の自宅にて）

因果者の心持

市川猿之助

延若さんとは私がまだ團子と云つた東京座時代（明治三十三年頃）からのお馴染です、その頃亡父段四郎と延若さんその當時延二郎はよく一座して私の母やまた叔父の役をしてゐましたから、今でも何だかなつかしい氣持が持たれます、また河合さんとは單に一二度の新舊合同劇の舞臺上のおつきあひでなく、私の息子團子と河合さんの息子さん明石さんとが芽生座をやつてゐる關係上、個人的に往來して居ます、そこで此度の合同は或意味から云へば萬更の他人同志の寄合でもないのです、私は一番目「渡海屋」で相摸五郎中幕「海の勇者」で末二郎所作事「操三番叟」の三番叟二番目「眞景累ケ淵」で新吉とズッと出て居ります、殊に累ケ淵の新吉といふ役は武士上りの町人で女の祟りで次から次へ惡事を重ねて行くといふ、弱い男の心を極度に表現せねばならぬので餘程の苦心を拂つて居ます、最初豐志賀の祟りで戀女房のお久の顏が變り因果の恐ろしさを知つた新吉は今迄正しい心に返らうとしてゐたのがどこまでも影に添ふてつきまとふ執念に遂にズル〳〵と惡事を重ねて行く所に新吉の心の惱みがあります、云はゞ現代人によくある弱い男なんです、私はそんな點に重きを於て因果者の心持を表現したいと思ひます、「海の勇者」の末二郎は萬事河合さんの老いたる母およしで、一ツウンと深刻な芝居をしたいと思つてゐますので此間も赤阪の河合さんを訪ねて種々と研究して居ます、「操三番叟」これは皆て松竹座其他に上演して御好評をいたゞいてゐるものですが、更に努力いたします。（東京歌舞伎座の樂屋にて）

◎新舊合同の辯

大西利夫

近頃劇壇に新舊俳優の合同こいふ事が流行の世間の評判にも上るがそんな事を別に問題にすべき性質のものではあるまいと思ふ、これが問題になるこいふのは我國の芝居道に大きな病弊があるためであると私は思ふ。

卽ち謂ゆる舊派と稱せられる歌舞伎俳優と、新派と稱せられる、昔の壯士芝居から出發した俳優が互に自己の領分に大きな墻をたてゝにらみ合ふこいふ可なりクダラない馬鹿げた事が現在でもやはり行はれてゐるためではあるまいか、芝居に新派だの舊派だのこいふ區別があるべきものではない。

勿論劇の內容によつてはある俳優には適するがある俳優には適しないこいふやうな事はある。それは然し同じ謂ゆる舊派の中にでも新派の中にでもあることで、特に新派だから、舊派だからこいふやうなことで各々演ずべき演劇の種類にまで區別を擴げるこいふのは極めて理由なき事である。

それが從來こういふものかさうした理由なき理由が通つてゐたやうである。

然し一方ではまた、謂ゆる新派と舊派とは行き方がちがふからどうしても一つの舞臺であはないこいふやうな事をいふ人がある。これも頗る理由なき理由だと思ふ、行き方がちがふならちがはないやうに俳優のお互で努力して行つたらどうだこいひ度くなる、舊派だからかう行くと突張り、新派だからあゝ行くとお互に頑ばつてゐるから何時までたつても合つてゆけないのではあるまいか、それとも俳優が下手でさう容易に行き方の融通がきかないためだらうか。

こんな惱まれ口を今更らしくたゝくまでもなく、近來俳優諸氏も頗る目ざめて來たので謂ゆる新舊合同が頻々と行はれるのは非常に愉快に思ふ。然しそれが世の評判にのぼつてゐるやうではまだである。どうか、そんな事はあたり前の事で誰も何とも思はなくなるやうな時代が一日も早く來るであらうことを望む、その時こそ我國劇壇のほんとうの維新を齎すものである。

延若・河合・猿之助

――合同そゞろばなし――

鳥江鐵也

朝の十時、東海道を徹宵走つて來た列車が東京驛にすべり込む、たまご色のけんちゃの洋服を着たパナマ帽のやせた男がプラットに飛出してチョコ〳〵とトンネルの中に吸ひこまれる、そして驛前へ現はれるこ、これが生意氣にタクシーを呼んで丸の内を走り出す――そして次の時間に築地の松竹合名社にチョコナンこ現はれてゐたのである。先づかう云へばそのやせた男が大阪から東京へ行つたこいふがいねんが皆樣の頭に生れる、そこでその男、それから早速赤阪永田町の河合武雄氏邸の西洋應接室に現はれたこしても必らず、地から湧いたのでもなく天から降つたのでもなく、こゝにくご〳〵しい說明をせずこも判斷が出來る譯、即ちやせた男――い、男こ云はないだけまづ可愛氣がある――鳥江鐵也である、今度合同の三優に會見のための上京で、第一の會見が河合氏から初まる。

「お暑うございます、この夏を如何お暮しでした」

「遂二三日前伊豆から歸つて來た所で、東京も隨分暑いですね、大阪はごうです」

「相變らず……」

「時に來月はまた大阪へ參ります、大阪は一年振りで此前は病氣になりまして途中で倒れましたが、今度はその入合せにウンこ活躍するつもりです」

「ごうぞ！」

「大阪の劇界は仲々賑やかですね、新劇團が澤山出來てゐる樣ですが……。東京でも新派の大合同が實現される樣に聞きましたがごうも俳優相互が裸になつて寄らないのでこう〳〵その實現もオヂャンですよ」

（この暑さに袷や綿入の着物を着て仲々容易に大合同の話がまごまらない新派の俳優連のお行儀のいゝのに鳥渡感心される。）

「それに私は新派こいふ言葉が嫌ひさ、一層の事新派こいふ言葉をブツこわしてしまひたいこ思ひます。そして一個の本當の裸の俳優こしてごん〳〵他流試合もし、また研究もして行きたいこ思ひます」

「結構な御意見、そいつを是非原稿に……」

「承知しました、今度の合同は實に私に取つていゝ機會だこよろこんでゐます、延若さんこは初めてですがあの方こは一度一所になりたいなりたいこ思つて居ました、云はゞ中年增の戀が叶つたこいふ形ですね」

「スルト、仲々濃厚な仲になる譯ですな」
「キッと意氣の合つた舞臺をお見せする事が出來ると思ひます」
漫談小一時間、永田町のおひるごきは　蜩　の聲のみ。
ひるからは色んな用件を片づけて四時すぎの日暮間近い頃と云つても決して涼風の立つ日暮でもなかつた、西に傾いた太陽は、まだジリ〳〵と暑熱苦を街頭に投げかけてゐる。歌舞伎座の樂屋、二階の隅つこ、猿之助氏と第二の會見。
「ごうも扨角お休みの所を」
と這入ると
「いや、い、んですよ、今饅頭娘の武助の役をあがつて、ころんでゐる所でした、何合同に就いて……、さうですね、延若さんとは東京座以來父段四郎の一座でお馴染、河合さんとは伴の國子と先方の明石さんとが芽生座をやつてゐる關係からごく心安くしてゐます、つまり親同志といふのでね、それで今度の合同は萬史他人の寄合世帶とも思へませんよ」
「そこで原稿を一ッ、お願ひしたいんですが……、今の樣な話を書いて下さい」
「忙しいが、ぢやまあ書きませう、お歸りまでにね」
「賴みます——しかし、何と暑い事ぢやありませんか、たまりませんね」
「これから開く猪八戒でウンとあばれたあとが眞景累ケ淵の新吉といふ大役です、この役序幕から大詰のチョン〳〵まで出突張といふんですから、とても一々この二階へあがつては來られません、それで二番目になると樂屋を階下の待合室に移動するのです、移動樂屋は私が此度初めてでせう……」
「移動樂屋、なる程、そいつあ面白い言葉だ」
「操三番叟は關西ぢやずゐぶん出して居りますよ、出す毎に新工夫は凝らして居りますが、今度も何か新しい演出をしたいと思つてゐます——まあ、君から大阪の見物に宜しくこの猿之助を賴んでくれ給へ……」
裸の猿之助氏、鏡臺前にあぐらを掻いてそんな事を云つて默る。チョン！舞臺で幕の切れた柝の音。
「オヤ、奉書試合かしまつたなッ」
ごれ猪八戒の扮裝にこりかゝろうかといふ樣な思入れの猿之助氏に大阪での再會を約してさよならをする。
「ヨー、何日來たッ」
「今朝つきました」
「それは御苦勞、サア、こつちへ……」
と唐木政右衛門のかみしも姿の姫若氏、階下の樂屋口に程近い部屋じバッタリ合つた自分に、目を丸くして云ふ。
衣裳を脫ぎ終つた姫若氏、一風呂浴びて鏡臺前におさまる
「河合さんとの合同、これが永久的なら面白いがなア、そして時々一流俳優を合同させてウンと變つた芝居がやつて見た

い。新舊合同もそこまで行くと徹底するがなア……」

「なる程……」

「眞景累ケ淵の甚藏といふ役は研究すればする程むつかしい役だ、ヤ、こもするこ凄慘になり勝の各幕に出て、その減入りこむ樣な氣分を浮立たせるといふ輕い樣で仲々重い役である、こゝの舞臺（歌舞伎座）では最近に於ける自信のある演出をやつてゐる、是非大阪の舞臺もこれ以上の効果をおさめたいと思つてゐる」

「脚本では非常に面白さうな役ですね」

「君はいつ歸るんだね」

「今夜」

「何時……」

「九時十五分」

「そんなら序幕だけ見て行き給へ、この劇では序幕が殊に面白いぜ」

「ありがとう」

「飯はどうだね、何なら一所にやらう」

こ丁度腹も時分頃、元來遠慮嫌ひの自分は洋食の箱を横倒しにして、假のテーブルに三枚の洋食を突つく。

それから延若氏のいつも乍らの氣焔があがつて、腰をあけ樣とするこ

「マアノ、まだいゝぢやないか」

こ話好きな彼は能辯を振ふ、能辯の内容はこゝに必要をみとめぬから省くとして、彼の院本通りの忠臣藏の四ツ目に定九郎が振つた能辯以上の能辯であつたから、時間の經つのも忘れて遂に二番目の序幕のアキが近づいた、その間に出入した人物は曰く針のお醫者さん、曰く作者木村錦花氏、曰く狂言方キクやん、男衆、床山、門弟延郎、等々々……。

延若氏の樂屋を出て見物席に廻る、序幕累ケ淵の場があいた、羽左梅幸が甞て見せてくれた清元の至藝『かさね』をリアリカルなものにした樣な舞臺が展開されて行くうちに時計の針が九時間近になる、こいつは大變こ急に樂屋の原稿から河合氏から屆いてゐる原稿、その他の用件をまとめて大汗を流し乍ら丸の内へかけつける――！

九時十五分の列車は、また元のやせた男を乘せて東京驛をすべり出した……。

芝居物語

海の勇者

長島富三郎

土佐の國佐多の岬に近き海岸一漁夫の家の塲が今異樣に緊張した雰圍氣の裡に展開された、薄暗いそしてじめ〳〵した臭氣が漂うてゐるかのやうな汚い部屋だ、正面の右に窓があつて左に戸口がある、窓越しには暮方の薄明の裡に跳躍しつゝある太平洋が見へる。

舞臺一面に陰慘なそして又勇壯な氣分が張つてゐる、初夏の或日の出來事である。

今戸外よりはやゝ烈しい風の音が聞ゑてゐる。窓の傍に老人が座つて漁具の繕ひに餘念がない、闇は烈しく襲つて來て舞臺次第に暗くなつて來た。老人は窓より荒狂う海を暗黑な空を眺めながら、

「また荒れやがる、およしッ・およしッ、何をぐづ〳〵しとるんか、早ふランプをつけんかい。」

と戸口の方を向いて急き立てる。

およしは戸口から内へは入つて來ながらその言葉も聞ゑぬかの如く、

「夜さになつたら又一荒れ荒れるやらう、また海奴が人間を欲しがつてゐるわい。」

と吐出すやうに云ふ。老人は、

「早うランプを點けつたら、何ぐづ〳〵しとるんか。」

けれ共およしは反抗的に、

「よう考へて見い、こなに風が吹いとるにランプが點くけ。」

「もう舟は皆戻つとるんやらうな。」

とおよしから絶へず云ひ込められる習慣になれてゐる如く話を外らす。

「あゝ戻つとる。先刻助の舟が一番おしまひに戻つて居た、今日の時化ては後家は出來んわい。」

「末はおそいな。」

と老人は尋ねる。

「もう直き戻つて來る、荒れとるけに舟を川上の方へ廻しとかな、いかんのやろ。……」

およしは話半に飯を佛壇に供へながら、

「勝の死んだ晩は今日よりも荒れとつたのう。」

と過ぎし日の悲慘な出來事を想ひ起こしたかのやうにじつとなる、

老人もその當時を回想して、

「あの時とは比べもんになるけ、岸に寄りつかうとする舟が、大浪を喰つてバラバラに碎けるんやからな、岸から鼻の先まで來とつても寄りつけんのやからな」

と彼も矢張り悲痛な面持になる。

「もうあの時の話はせん事にしよう。また勝の事を思ひ出すけに。」

「海は俺達の飯の種や、なんぼ恐しうても寄りつかないかんわい。今度町へ行つたら澁を忘れるな。」

「勝は鰹を釣らしたら日に四兩や五兩は何でもなかつたな、あいつは少ひさい時から他人の事云ふたら先になつて働いとつたがこう〳〵他人の爲に命をほうつてしもた。」

「まアねゝわ、此の濱の奴は壓の上で死ねんのや、身體丈でも歸つて來たらまアねゝ方や、町の奴が云ふとる、香西の奴棺桶入らずや、棺桶屋は香西にない云ふとる。」

むしろ自分の職業の爲に運命を自覺してゐる老人は悲慘な死を遂げた子の母として愚痴を云ふおよしを慰める、およしは戸口から空を見上げながら

「また荒れるぜ、巽が眞黑やア。」

戸外は荒れ狂ふてゐる。

此時隣人が這入つてくる。

「村の舟は皆戻つとるんやらうな。」

およし見て、

「今日は荒模樣になると皆逃げて歸つて來たのや、先度の事で懲りとるけにな。」

隣人も此家の過ぎし日の悲劇を知つて居るらしい。

「そうやらう。ねゝ若い者が五人も死んだんやからな、勝太郎さんが死んで之から困るやらうな……だん〳〵酷ふなつて來るなア。」

風の音は益々烈しくなる。

老人は隣人に問つて、

「今も云ふとんや、彼奴は勳章の金がはひるしな、腕はあるしな、年が寄つて彼奴

にほつとかれては生きるせゐがないわ。」
流石に老人も淋しそうに云ふ。
「けどな、この村て死んだ奴は多いけど知事さんから使が來たり、郡長さんが葬式の伴をして呉れたのは勝太郎さんだけやないか、町の新聞やつてゐらう書きよつたぜ、あの墓石を見いや、この近所には二ツとない大きいもんやないか。」
と隣人は慰撫的に云ふ。
「ゐゝ死に方やろ、死に賃が七圓五十錢やと云ふからな。」
又してもおよしは愚痴を云ふ。
「おかアのやうに云ふたもんでないわ、お上から下さる金やもの七圓五十錢やて貴いもんやないか、村の達藏が身投を助けた時やつて、たつた一圓五十錢やもの、それから見たら七圓五十錢云つたら大金ぢや。」
「阿呆くさい、七圓五十錢位の端金、鰹を釣つたら二日か三日で儲けるわ。」
と衷心から吐くおよしの打算的な言葉も憐れである。
「お上が下さるもんやけに第一名譽やないか。」
「勝が死んでから年に三百兩も違ふけになア、難船の人が三人て皆助かつたのに助けに行つた方が七人とも死んでしもて、こんな阿呆くさいことがあるもんけ、助けに行かん方が人間の數から云ふてもよつぽど得や。」
と早や立聲になる、老人は、
「愚痴を云ふな、お前は記念碑の式のときにも暈病を起しやがつてとうゝ出なかつたが、まだぐづ〳〵云ふんか」
と隣人の手前強く云ふ。
「當り前やないか、お前のやうなお人よしとはちいと違ふけになな、郡長さんに賞められて嬉しがつて泣いたりしやがつて、それほど息子が惜しうないんか、息子をとられて七圓五十錢貰うて、おだてに乘つて嬉しがつとる馬鹿があるけい、難船があつたら救はんならんといふ青年會の規定が無茶や年の寄つた二親をほうつておいて他人の命を助けて何になるんや」
と激して云ふ。
「このあまア、頬けたはち張りとはすぞッ。」
「何吐しやがるんや、おいぼれ」
と二人は爭はんとする。隣人はそれを止めて、
「まアゐゝわ、あとになつた事は仕樣がないわ。」
となだめる。
全く暗くなつて來る、およしは戸棚からカンテラを下ろして火をつける。
「風がひどいけに火がつきやせん、これで辛抱するんや。」
此時戸口があいて吹き込む風と共に末次郎が歸つて來る、上品な顏と黑い眸をもつた十七歳位の少年である、はいるとすぐ上りかまちに身體を投げかけて、
「おゝ腹が空いた、お母、飯をすぐ喰べさして。」
と空腹を訴へる。
「沖はどうだつた。」
と隣人の問に、
「雲が出たから、滅茶々々に漕いだんや、今日はゐゝ工合に遠くへ行つとらんでな、岬が見ゐとつた。」
戸外は益々荒れ狂うてゐる。吹き募る風の音が物凄い。
「だん〳〵ひどうなつてくるな。」
と老人は外の荒の音に耳を傾げる。
「末さア、兄が居らんけに骨が折れるやらうな」
「そやけどあゝ云ふ事で死んだやけに仕方がないと思ふて働いとんや、誰やつて難船したときに助かりたいからな。」
彼は卒直である。
「勝さんが死んだんで青年會長の選擧がある云ふけんどもう勝さんのやうなゐゝ人はないわ。」
と獨言のやうに云ふ。およしは飯の支度をしながら窓外を見て、
「また風がひどうなつてくるな。雨も降り出したぜ、末やおかずはひじきのたいたんやぜ。」
此時隣人は歸りかけて戸口を出たがすぐは入つて來て、
「誰かしらん走つて來るぜ。」
と心持緊張して云ふ、同時に風に交つてかすかに、
「……が歸つたぞう……舟が歸つたぞう……。」
と聞ゐて來る。
「ゐゝ舟が歸つて來た、誰の舟やらう?」

「誰の舟やら分らんけど灯が見にるやア……。」
と不明瞭に聞へる。
「誰のやら。」
「皆歸つたと思ふたが夫りや一艘おくれたんやな。」
「この風ぢやまだ岸につけんやろ、ひどうなつて來るけに。」
「難しい、どても着けやせん、どら行つて見て來やう」
と隣人は急いで歸つて行く。
「不思議やなア、もう誰も殘つとらんと思ふとつたのに、わしも一寸行つて見てくる。」
と行きかける末次郎をおよしは引とめ、
「飯もたべずに行かんでもにゝ、」
「一寸行つて見て來るんや。」
「行かんでもにゝ、さア飯をお喰べ。」
と引とめる。
慌しく一人の漁夫が駈け込んで來て、
「濱で火をたいてやるんやけに薪をかして呉れ。」
といふ。
「誰の舟や。」
「誰の舟やら分らんけどあの通りにわめいてゐる、今、川の方へ調べに行つたんや。」
「やつぱり助け舟を出すのけ。」
「出さないかん、先度の事があるけんど見殺しには出來んからな。」
とおよしに云ふ、此時、初めて、海上からの悲鳴が風に交りてやゝハツキリ聞にて來る。舞臺は益々悲壯な氣分が漲る。

「あの聲を聞くと二三年命が縮まる、ォれを聞いたら出けずには居られんわい。」
「阿呆な、わしは生れてから耳か聾うなるほど聞いとるけに何ともないわ、お父の死んだ時にも兄貴の死んだ時にも思ふ存分聞いとるけに。」
およしは薪を一束持つて來る。
漁夫それを見て、
「にらう、ケチ〳〵すんやな、」
「ケチ〳〵せいでか、にゝ息子一人とられたんやからな。」
「勝さんが生きこつた時はこんな時は一番に飛び出したな、人の爲云ふたら命でも惜しんどらん。」
「その代りに自分の親をほうたらかして苦勞させやがる。」
又およしは愚痴を云ふ。漁夫は返事もせずにそのまゝ薪も持たずに出て行く、およし後見送つて、
「話が分らん奴に薪一束でも惜しいわ。」
「お母一寸行つて來るぜ。」
「行くなと云ふたら行くな、又勝のやうに助け舟に乘つて岩に打ちあてゝ他人樣の爲に命をほりたいか。」
と末次郎が行きかけんとするをおよしは止める。
「何を云ふんや、また舟を出すともきまつとらんに。」
「勝はな、わしに長年養うて貰ふとりながら一文も貰ふた事のない　人樣の爲に、命をほうりやがつたんや、お前もそんな眞似をするやないぞ、あんな石碑が建つたつてあれが何になるんや、年の寄つた兩親に何のたしになるんや。」
「愚痴はにゝ加減にしとけ。」
「云わいでか、何ぼでも云ふんや、生みの親を捨てゝ行つたものを皆よつてたかつて賞めやがつて、私に氣の毒や云ふてくれる奴は一人やつてありやせん、働き盛りの子供をとられて何が名譽や」
とおよしは益々ヒステリックに叫ぶ、末次郎は母にかまわず窓から海上を見つめてゐる。悲鳴は風の絶間々々に聞にて來る。やがて海濱に炬火が點ぜられたのが見にるすると多くの人々がその光に寫し出される風に交りて喧嘩の聲も聞へる。以前の隣人が駈け込んで來て、
「おい、およしさん何か燃すものはないけ。」
「もう先刻出したやないか。」
「こういふ時ぢやけに、もつと出してくれ後で青年會から返すそうぢやけに。」
およしは嫌々ながら薪を渡しながら
「一體誰の舟や、」
「また判らん」
と云ひすてゝ去る。
舟はだん〳〵近くなるらしい、舟の悲鳴も人々の喧嘩の聲も聞へる。風は益々ひどくなる、又一人の男が來て、およしに、
「綱がありや借してくれ。」
「誰か泳いで行くのかい。」
「先度の事があるけに泳いで行つて綱を渡す事にしたんや。」
「誰が行くのや。」

「まだ判らん、行くものがなけりや青年會員で鍬引や。」
「末にも引けい云よまいな。」
と不安さうにたづねる。
「心配せいでもいゝわ、末さんはまだ子供や、それに兄さんが死んどるんやもの、誰が末さんをやらすものか。」
「そうやうな。」
と漸く安心して綱を出してやる。
末次郎は
「誰の舟やら分らんのか」たづねる。
「まだ判らん。」
他の男が戸口に現はれて、
「俺が行く事になつたんや、綱はあるけ。」
「お前が行つてくれるんけ。」
「綱さへ摑んどりや大丈夫や、めつたにド手な事はやりやせん。」
他の男が又來て、
「おい他村の舟らしいぜ。」
「何だ他村の奴か。」
「それでもやつぱり行つてやらないかんやろ、村同志の交際ぢやから。」
「ウン行つてやる。」
と三人は去つて行く、末次郎は窓からじつと沖を見て居る。およしは不安そうにして又熟視するやうに末次郎の傍に立つてゐる、そこへ隣人が入つて來る、そして投出すやうに、
「なんや阿呆らしい密航船や。」
「何や密航船か。」
「隣村の密航船や、確二も飛び込むのを止めてしもた、密航船の爲に命でもほうつたら笑はれ物やからな。」
「密航船なら誰も行き手はないわ。」
「さうぢやらう、密航船の爲に命をほうつたらつまらんからのう。」
と漸く安心して末次郎の傍から離れる。
「淺見へ知らしてやらんのか。」
「こんな雨風の晩に二里の道を行く奴があるけ、それに密航をするやうな奴の舟ならほうつておいてもかまやせん。」
戸外から、
「だん〳〵西へ流されるな、岩へぶつつかるとおしまひやな。」
村人の聲には傍觀的な興味と安心とが含まれて居る。末次郎は凝視してゐたが何事か耳にしたらしく、
「子供が乘つとるんやな。」
「大人が三人と七ツ八ツの子供が一人居る。」
と外から聞へて來る。
「誰も行つてやらんのか……。」
末次郎の聲はやゝふるへてゐる。
又外から聲がして、
「それ程命の不用なものは居らんわい」
瞬間末次郎はふいッと窓から外へ飛び降りる、およしが氣づいて戸口へ馳けよる。
「末やどこへ行くんや、飯を喰べんかい。末や、末や。」
およしの聲は甲高い。しかし、末次郎の返事はない、皆やゝ不安に囚はれる、舟は愈々近くなつたらしく悲鳴が手にとるやうに聞へて來る。
此時、急に、
「やア誰かしらん、綱を持つて飛び込んだぞ、誰や〳〵。」
と外から聞ける、およしそれを聞いて烈しき不安に打たれながら外へ馳け出す。
「末や、末やア。」
聲を限りに呼ぶ、その後へ他の三人がつづいて出る。戸外には又新しい喧噪と動搖とが風の音と共に起る、その裡に交つて
「綱を離すな、——一體誰や、——岩の方へ流されるぞ、——飛び込んだのは誰や、——ほらあすこへ浮んだ、——また沈んだぞ——。」
種々な人の叫び聲が聞ける。
「末や、末やア——。」
およしの聲が甲高く聞へる。
「おい見ねんぞ——見ねんぞ——綱を離したんもないか、——おい引ッ張つて見い、手答がないか、——見い、綱はつかりや、——」
種々な人聲がする、
「末や、末やア——」
およしの狂亂に近き聲が聞へる、吹きまくる烈しき風の裡に、まだこの叫び聲が續いて聞へる。
——幕——

芝居と怪談

並山拜石

今度中座にて「眞景累ケ淵」を御上演なさる由、是非觀たいものだと思つてゐます。

夏の一本芝居として東京歌舞伎座に於いて上演の折は上出來だつたと聞いてゐましたが猿の新吉、廻の甚藏ならはさもあるべき事かと思ひます。

△

先代右團治は「累」を度々上演したさうで、且つ得意のものだつたさうですね。それは芝居好きだつた私の母からよく聞かされた事でした。

近頃は一向見ませんが、子供の時分母と一緒だつたか見た印象が尙ぼんやり殘つてゐます。尤もその「累」も今度上演の「累」とは骨組の違つてゐるものかも知れません。

△

日本の劇に仕組まれた怪談は所謂快談で、陰慘を表としてゐますが、その裏は陽氣なところがあります。「四谷」にしろ、「牡丹燈籠」にしろ、この「累」にしろ、その他種んなものを數へてみてもさうしたところが見ます。

あの幽靈は如何にも物凄いものですが、どうも滑稽じみたところがあります。即ち凄味より快味と云つたところがあります。それは勿論、脚本そのものが——作者その人が意識してさうさせたのかも知れません。が、それは俳優の演出がかくあらしめたのも見のがせないでせう。

ここにかく兩方の意識が、寄り合つたのでせう。各作を通じて、その書き下し當時は、たとへ俳優の藝は如何であつても、當時の見物は、その凄味と、陰慘なシーンとに怯にたことでせう、ところが現今の見物は、今これらの劇を見ても凄味、陰慘に怯にるより寧ろ快味と陽氣とを感ずるでありませう。時代ですねに。

△

それは兎に角、この陰慘味は、日本劇の特長でありませう。寡聞な私は外國の劇にかうした因果を主として描いた陰慘な戲曲にぶつかつたことはありません。

眞景「累ケ淵」劇に就て

中劇場にて

三浦おいろ

河内屋丈が久々歸阪に際し當中座九月興行に上演さるゝ二番目「眞景累ケ淵」は曩に東都の知友木村錦花氏が脚色されるに就て該地方の實地を研究せんと河竹繁俊、川尻清潭の兩氏と共に出掛けられ踏査しての上場なれば定めし期待される狂言だらう。

この累ケ淵は故三遊亭圓朝の讀ものを先代の音羽屋（五代目尾上菊五郎）が自身に演ぜんとて作者河竹新七に相談され事を當人より聞き得たる寺嶋丈の實話を左に掲げることにした。

元來寺嶋は際物の狂言が大好きで既に圓朝物を脚色して演じたる「塩源多助」「安政三組盃」「栗田口」「名人長次」など、この累ケ淵をも脚色せし當時の登場人物は

下總の甚藏（菊五郎）おるい（福助現歌右衛門）お賤（秀調）等にて音羽屋は甚藏とお賤を早替りにて扮せんとしたが新吉に扮する俳優が自分の意に叶はなかつたから折角の狂言を其儘として夫れに代るべき狂言を命じ脚色されたのが即ち「怪異談牡丹燈籠」にてこれを直ちに上演する爲め自身に丁度甚藏に代るべき伴藏とお賤の代りのお米に扮したるなどは頗る興味あることである音物語を不圖思ひ出したまゝ。

喫煙室

蓼雨

△神代以來の暑さいふ八月に箱根嶮道を往還八回、寢ゝ車の寒暖計は九十何度といふ最後の上京の夜、あなたと妾は百度突破よテナ工合の米國人の若夫婦が長時間喫煙室を占領して挺でも動かぬ。

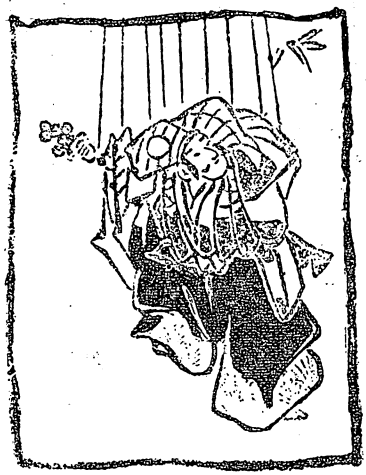
△怪しからぬ次第である、此麼時に關東名物の地震が一と揺り來れば住いと尻目にかけて洗面場へ這入る、繩棚の上に番附が載つてある、扇面の先で展げてみると、中座、浪花座、文樂座、東京の歌舞伎、帝劇、松竹、と一と並り揃つてある。

△驚て用を達して扉を開けた刹那、右の番附が喫煙室から見えてチチンバアノ〳〵と取りに來た、摺れ違ひつゝ目禮、これが緣となつて喫煙室は三人となつた。

△生マ噛りの和語のいける男の方の通譯で一切の番附の說明を仕た、さうして今までの敵はいつの間にやら大日本帝國のお客なり、吾人と同業者なりと握手した、喫煙室にも藝術にも遂に國境は無かつた。

△列車は晴を突いて東へ々々、彼女彼男の寢臺のカーテンは主待ち顔に搖つてゐる、が彼等は何時までも腰を上げやうとせぬ。

△我輩が去つた跡の喫煙室の寒暖計は何度に昇つてゐたかそれは知らぬ。



操三番叟

—中座九月興行上演—

登場人物

一、三番叟
一、翁
一、千歳
一、同

長唄囃子連中

本舞臺平舞臺向ふ一面松羽目にて見切り能き所に三番叟の入りし箱を置きあり長唄連中居並び居て片しやぎりにて幕明く。

ト直ぐに唄に成り

「天照らす春の日影も豐かにてさす手引く手の一トさしは昔しを今に式三番ありし姿を假衣に竹田が作の出立ばへ

ト是にて翁千歳よろしく出來る

「とうくたらりくらたらりありゝらゝりこふ

「千代の始めの始芝居相變じて賑はしう人の山なす蓬萊に鶴の羽重ね龜の尾の長き榮

ゐを三つの朝幸ひ心に任せたり
「鳴は瀧の水〳〵鳴といふのはよい辻うら
よ天津乙女のさまが許たへずたふたりたへ
ずとふのが誠なら日は照るとも濡る身にき
つゝなれにし羽衣の松の十かへり百千鳥た
へずこうたりありうご
トよろしく舞ひ納る
「其戀草は千早振る神のひこさの昔しより
盡ぬなぎさのいさご路や落來る瀧の末かけ
て結ぶいも背のよい中こしに天下泰平國土
安穩今日の御祈禱なり
ト翁よろしく振り舞て翁千歳は入る後見
は三番を箱より出してよろしく操の糸
しらべ有つて
千歳　おふさへ〳〵よろこびありやわが此處よ
り外へはやらじとぞ思ふ
「天の岩戸を今日ぞ開ける此初舞臺萬世も
花のお江戸のこつぱひとへにおこり立おこ

がましくも御目見得にほんに鵜の眞似烏哉
「難江の岸の姫松葉もしげり爰に成かし住
よしの神の惠みのあるからは君にあふぎの
おんたこへあふこは嬉し言の葉も濱の眞砂
の數々によむこしつきぬ年波や
「友じよの翁はあだつき物よつい袖引いて
なびかんせそふも千歳中人して水ももらさ
ぬならぱ深いゐにしぢやないかいな面白や
「相生の松夜しゆびにあふの松ほんにこゝ
ろの武隈も岩代松や曾根の松あがりし寢や
の睦言に濡て色增す辛崎の松松のすがたの
若みごり
「千秋萬歳萬々ぜい五風十雨もおだやかに
めぐみをゐはふ種まきこうたいかなでしゆ
くしける
トよろしく操三番の振有て鳴物に成り

――幕――

編輯後記

◇「中座」發刊が急に企劃されたので編輯の仕事がまわつて來た。不慣の事だけれども姥谷君の努力で雜誌の體裁になつた事は實にうれしい。何しろ旬日に足らない中に仕上げることのことで三十三度の暑さものかは實際汗ダクでやりあげたのだ。

これをして思へば定期雜誌の編輯者が羨ましい。

◇記事もよほど集まる豫定であたところ、發行日にぜひ出したいと思つて締切つた爲めに思ふことの半分も出來なかつた。然し劇雜誌としては珍らしく俳優諸氏が眞面目に寄稿してくれたのは本誌の誇りだ。それから木村錦花氏が本題「累ケ淵」に就て最も有力な集說を寄せて下すつたことを感謝する。第二號の目醍ましき活躍を御期待あつて本號の御愛讀を願ひたい。

◇「眞景累ケ淵」の脚本掲載頁のカットは情趣を盛るために特に道具帳によつてつくりあげたものです。寫眞版中素顏の俳優は初役のため止む得ず掲載のやうなもので組合せてしまつた。この點は讀者諸氏と俳優諸丈にお斷りして置きたい。

（成山生）

◇冠頭にも書いてあられる白井社長の「創刊の辭」にあるやうに、大阪唯一の歌舞伎の殿堂とも言ふべき「中座」に斯うした研究を主とせる機關雜誌があつても無意義でないと思ふ。寧ろ私は今度の「中座」創刊を諸君から感謝して貰ひたい位に思つてゐる。

◇內容の充實を計つて權威ある雜誌としたら、執筆者は厚意を以て書いてくれるだらうし、諸君は絕好の研究、機關雜誌として愛讀してくれるに違ひない。引いては編輯に努力する者の大きい悅びと言へる譯である。次號からはこの抱負と諸君の期待に背むかない「中座」にしたいと思つてゐる。

◇今度は創刊號でもあり、僅かな旬日の間に企劃、編輯されたので、研究としての「中座」は餘りに貧弱であるかも知れないが、その點は幾重にもお詫びするはかりである。

◇御多忙中にもかゝはらず執筆して下さつた寄稿家諸氏、三代歌川豐國筆『累の亡魂』の版畫で煩はした京都吉川觀方畫伯原稿のため態々上京して共に援助して下さつた本社の鳥江氏及び文藝部の諸兄に深く感謝する次第である。（姥谷生）

【不許複製】

雜誌「中座」
歌舞伎研究
怪談號
附脚本
「眞景累ケ淵」

一部 定價金三十錢

大正十五年八月三十日印刷
大正十五年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町
松竹合名社內
編輯者 姥谷久一
發行者 成山桂三
大阪市南區和泉町壹
印刷所 合資會社 ミカド印刷所
大阪市南區久左衛門町
發行所 松竹合名社 宣傳部

各劇場の

前賣切符

電話にて

の御申込は必ず前賣切符發賣所專用電話をお呼び出しの上御用命下さいますれば御場席決定の上遠近多少に拘はらず早速配達いたします

前賣切符發賣所
專用電話

南六三六一番	道頓堀	浪花座
南一二七九番	同	中座
南六九五六番	同	角座
南六九七八番	同	辨天座
本局八九七番	御靈	文樂座

（各座にては午前十時より開演中發賣致します）

御觀劇は

プレイカイドを

御利用下さい。

高麗橋通心齋橋筋南入　電話本局　三三〇九番・三九九五番

各座の切符が[illegible]ありますから今すぐ言つて調ひます

初秋のお芝居

中座

道頓堀

九月興行

一番目 渡海屋 二幕
菊池寛氏作
田中良氏舞臺裝置

現代劇 海の勇者 一幕
長唄連中
囃子連中

浄瑠璃 操三番叟

三遊亭圓朝原作
二番目 眞景累ケ淵 三幕

河合武雄
市川猿之助
市川笑猿
市川段猿

當九月興行

中村雀右衛門
中村扇雀
中村章景
實川延郎
實川延雀
實川芦鳳枝
片岡松之助
嵐吉滿寿
片岡松幸
實川鳳蔵
中村霞仙
片岡當之助
嵐吉三郎
實川延若

毎夕四時開幕